

平成30年度
文部科学省委託事業
『障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究』

「ブリッジスクールによる障害者の生涯学習と社会参加の実現」

事業報告書



社会福祉法人 八ヶ岳名水会

あまたの懸け橋^{か はし}

ハヶ岳名水会理事長

坂本 ちづ子



夕暮れ時、一人の青年が事務所から出て来た。

「あれ、君は……」と呼び止め、よもやま話をする折、「ぼくは、ブリッジスクールの一期生。ここに来るまでは、友だちはおらず、話をする人もいなかった」と。

一年間通う中で、仲間ができ、生活や仕事、将来の夢ができた。一つひとつ体験を積み重ねてくれた支援の人たち、講師の先生方のお陰で、自信がついた。生活の場もグループホームから、今では、アパートに移り一人暮らしで自炊もしている。就職もでき、預貯金もでき始めた。「一人暮らしは、同期のFさんがやっているのを聞いて、ぼくもそうしようと決めたんだ」と。話は尽きない。

六、七年前に初めて会った時の彼からは想像もできない、穏やかさと自信が満ち溢れている。同期のTさん、Mさんの話もしてくれ、さわやかさを残してバイクで走り去って行った。

「地域共生」を具現化するための日野春學舎構想。その中の一つ、「ブリッジスクール」。

少子高齢化が加速する中で、障がい故に、あるいは障がいの有る無しにかかわらず、十分な環境や機会、手段が講じられなかったために、引きこもり、就労困難等々、様々な生きづらさを抱えた方々に、排除や敬遠から「人生の主体者」、「地域の一員」、「一翼を担う人」になってもらうべく、ブリッジスクールはスタートした。枠や制度の中になっただけに、先行経験に学びながら、スタッフだけで行き詰った時は、他の手を借りるを鉄則に、方向性は彼ら、彼女たちが持っているを鉄則に、手探りで作り上げてきた四年間。大いなるやり甲斐のもと、当初は一コースのみであったものが、三年目には四コースとなり、個別状況に応じた年間計画のもと、31名が飛び立っていった。社会状況が難しくなればなるほど課題も難しくなる。しかし、今や「かけはし」の役は、当法人だけではなくなっている。多くの「かけはし」があることを確認して、次なる一歩へ！！

ブリッジスクールの取り組み から見えてきたこと

社会福祉法人 ハヶ岳名水会
ブリッジスクール校長
小泉 晃彦



私達の法人ハヶ岳名水会では、平成4年の法人設立以来、一貫して「地域という大きな家族」のテーマの中、障害のある方の地域生活支援に取り組んできました。この26年の間に、社会も大きく変わり、多くの方が、グループホームに出て、地域で就労し自分なりの生活が営めるようになりましたが、本当に社会の一員として受け入れていただき、自分の目標に沿った生活が実感できるまでには、本人の努力も含めて、長い時間と多くの地域の方々に支えていただく必要がありました。また、様々な事情で、相談に訪れ、支援を求める方も多様化し、今迄見えなかった「日々生き辛さを感じる方々」への支援の在り方を考えていく必要が出てきました。

平成25年、廃校になった日野春小学校を借り受け、新たな取り組みを模索していく中、自信が無く、挫折しがちな方たちへの、自己肯定感を育む学びと仲間作りの場として、ブリッジスクールが始まりました。この取り組みには、退職された特別支援学校の先生方、地元企業の方、産業カウンセラーや地域ボランティアの方々等多くの方の協力があり、プログラム作りから、運営まで支えていただきました。

開始から、5年が経過し、40名近い方々を支援していく中、主体的な学びが持つ可能性と、人が本来持つ力の素晴らしさをあらためて感じています。もしかしたら、障害や生き辛さが、本人らしく生きる場を奪ってきたのかもしれないなとさえ感じることもあります。それぞれの違いを認め合う社会、共生社会とは言いながら、まだ、その入り口は、始まったばかりかもしれません。

この取り組みの答えは、まだまだ見えてきません。この報告書を読んでいただき、社会での学びの在り方を、共に感じ考えていただければ幸いです。

はじめに

私たち社会福祉法人八ヶ岳名水会は、山梨県北杜市および韮崎市という、八ヶ岳山麓に広がる水と緑に恵まれた地域で、平成5年より障害者の地域生活を支援する社会福祉事業を行ってきました。知的障害の方を主に、精神、身体、盲ろう、発達障害および触法の方も含め、多様なニーズに対応した総合的な支援を展開しています。

この26年間、皆様のご支援により制度の枠の中にある事業は拡大してきましたが、ふと地域に目を移すと、そこには少子高齢化や産業の流出など、どこの地方でも同様に抱える課題によって衰退しつつある中山間地がありました。これまでお世話になった地元の方々に何か恩返しができないか。そこで、当法人がこれまでの活動の中で積み重ねた強みを制度の枠の外にも活かし、地域社会を再活性化させることを目的とした公益事業「日野春學舎」構想を平成26年度からスタートさせました。

この構想は、「農福連携」「アート企画」そして「ブリッジスクール」の3部門で構成されています。この中で「ブリッジスクール」は、これまで当法人が「障害者就業・生活支援センター」や「地域生活定着支援センター」事業で培ってきたノウハウを活かし、過疎化する地域の中で孤立していく生き辛さを抱えた方達と社会との架け橋「ブリッジ」を創ろうという試みです。ここで私たちは敢えて障害の有る無しを問いませんでした。現状の制度の狭間にあって、支援を得られていない方達にこそ「ブリッジ」が必要だと考えたからです。

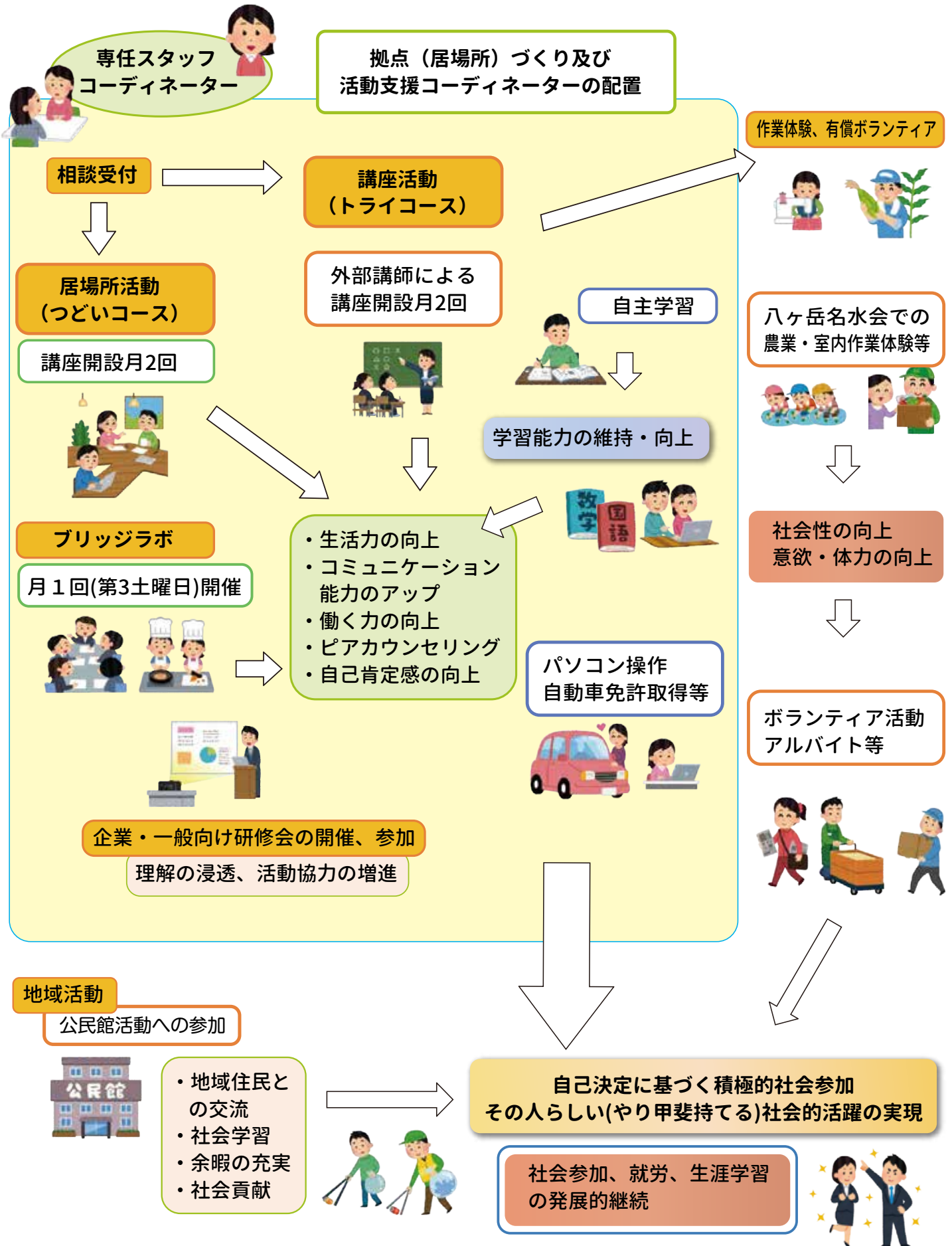
「ブリッジスクール」に取り組み始めた当初、私たちは集まった方達にこちらから何かを教えることで”学び直し”をしてもらおうと思っていました。しかし、この4年を経過する中で、彼らを何より大きく成長させたのは、同じ悩みを抱えた仲間との”共感”であったと強く感じています。

生活の場として連帯や協働などの機能を失いつつある地域社会の中で、彼らは独りで、或いは家族とともに孤立していました。そんな彼らが「ブリッジスクール」という場で出会い、自分と同じように生き辛さを抱えた人の話を聞くことでその思いに共感し、自分は独りでは無かったと実感して仲間から力を得ました。そして、自分を振り返り、自分の思いを自分の言葉で語ることができたとき、彼らは社会に向けた新たな一歩を自分の足で踏み出していきました。

失われつつある人と人との絆を取り戻し、彼らの力を信じ、彼ら一人ひとりが自分の足で自分の人生を生きることができるようになる地域を創ること。これは、この度の「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」が目指す「障害者の生涯学習」と、軸としてその趣旨を共有するものであると感じております。

この冊子には、そうした彼ら一人ひとりと、私たちとの取り組みの軌跡を綴らせていただきました。彼らの成長に”共感”していただけましたら嬉しく存じます。

～平成30年度ブリッジスクール展開図～



トライコース

～働くことと働き続けることを目指して～

1、活動の目的とプログラム

・活動目的

ブリッジスクール「トライコース」は、障害のあるなしにかかわらず、学ぶことに興味のある方、就職を目指してスキルアップを考えている方、仲間と何かしたいと思っている方を対象に、自己発信を大切にしたプログラムで学びあうことを目的としています。

・大切なのは自己発信

社会参加に課題を抱えながら生活している彼らの声に耳を傾け、社会への一歩を応援するところでもあります。私たちが過去の活動から知ったことは、彼らは一旦は社会に出て一般就職もしていましたが、発達障害や知的障害に起因する躓きによって深く傷つき自信を失い、精神を患うところまで追い詰められたということでした。しかし、そんな彼らが同様の悩みを抱えた仲間と共に学び直すという再挑戦の機会を得たことで自信を取り戻し、再び自分の足で歩き出そうとする姿を目の当たりにしてきました。

ときに間違えることがあっても、自分の進む道を自分で選択する自己決定を繰り返していくことによって、彼ら自身が真の意味でそれぞれの人生の主体者となり、自らの意思で積極的に社会参加し、その人らしくやり甲斐のある社会的活躍が実現される可能性があることを実感してきました。支援者が良かれと思って押しつけた選択は彼らの実感をとまわず同じ失敗を繰り返すことになりませんが、彼らの自己決定から生じた結果は例え失敗しても彼らの気持ちはくじけずその先につながっていくことを実感しました。

そのような彼らの姿を見てきた私たちにとって、人口減少によって急速に活力を失いつつある地域社会だからこそ、彼らが活躍することの意味は大きいと考えられます。彼らがもう一度学び直すことで自信を取り戻し、自らの強みを活かして地域の一員として活躍できるようになることは、地域で信頼され必要とされる人材となり、それが彼らの更なる自信となり相乗効果によって地域全体の活性化が促進されていくものと感じています。



本人からの発信を大切にすることで、コミュニケーションについて基礎的な技術の再獲得を促していき、また同時に、「私の取扱説明書」の作成を通じた自己覚知によって、自分の言葉で自分の意思を発信できるようにする。こうしたアプローチは軽度知的障害の方や発達障害の方に対して重要です。これによって、受講生が自分自身のその後の人生を見つめ直し、自分の意思によって、その人らしい生き方を実現させることができるようになると思います。



トライコース講座風景

「就労」を学びの大きな目標の一つとして掲げ、人口減少社会にあって、障害のある方も、社会との繋がりが少なくなってしまう人も、地域社会の担い手として働いていただくことを目指します。

入校から修了までの一年間のカリキュラムを組んでいます。カリキュラムは、受講生の声から生まれたものが主体となっています。受講生に「成し遂げた」という自信を獲得していただくと同時に、一年を目処として次のステージに進むことを意識していただきます。



私の取扱説明書

外部講師の講座は、月1回～2回（1回2時間半）の開催とし、活動内容は過去3年間の中から受講生のニーズが高かったものを組み合わせました。

講座の中でも自己発信に重点を置き、当事者の言葉と体験から学べるようにしています。また、1年を単位とするため、仲間づくりから、コミュニケーションの基礎、自己覚知、社会についての学習、実践、プレゼンテーションの体験、まとめ振り返りまでを行いました。



コラージュ作品

2、活動の様子、検証、課題

・プログラム

参加者 延べ 142 名

	講座活動
5月	入校式、オリエンテーション（一年の目標） マナー、傾聴力、関係構築力
6月	コラージュ 他己紹介、他者から見た私、ヒアリングシート記入
7月	暮らしと私（お金）生活費の使い方 暮らしと私（お金）年金、保険 消費者センター出前講座 携帯電話、詐欺について（オープン講座）
8月	人間関係（クシュボール作成）職場であったことを話そう セルフコントロール ○×クイズ（仕事編、生活編）報連相
9月	職場見学に向けて 中ポツ講座 働くために知っておいた方が良いこと講座 仕事人に聞く（オープン講座） 仕事調べ、企業調べ
10月	職場見学 振り返り（発表シート作成、発表） ドナルド・E・スーパー「14の労働価値観」
11月	私の説明書作成 パワーポイントでの資料作成を学ぼう 個別面談
12月	活動のプレゼン準備 （企業啓発研修）
1月	企業啓発研修会発表リハーサル 企業啓発研修会発表 企業啓発研修会発表の振り返りと2月の予定
2月	自己PRを考える（能力・資質編、自己PRの核の抽出） 自己の幸せを紐解く アルバム作成
3月	トライコース修了式

トライコースイメージ図



ブリッジスクール入校
=新しい一歩



自己覚知
=自分自身を知る



自己紹介
=自己発信の練習



企業見学
=自己分析



ビジネスマナーの学習
=社会の再認識



振り返り用紙の記入
→返信(フィードバック)



「私の取扱説明書」
作成



グループワーク
→互いの意見を尊重すること
でコミュニケーション能力と自
己肯定感を養う。

ブリッジラボから(修了生)
からのフォロー



企業実習 & 有償ボランティア



自分たちのことをプレゼンテーション
平成31年1月16日
啓発研修会



修了式
就職ラボ

・活動の様子



講座は、月に2回、隔週の土曜日に開催。9:30から12:10までとしましたが、毎回のように、時間をオーバーして行われるほど受講生が熱心でした。

入校式では、一般的なセレモニーを行うことで、始まりと所属を意識していただき、同時に「一年の目標」を考え、自ら学ぶ姿勢を作っていただけのようにしました。

初対面であり、コミュニケーションが苦手な方たちであることから、アート活動を通しリラックスしていただけるようにすること、また心理の面を垣間見ることのできるようにコラージュ制作を行い、皆で発表し、褒めあったことでそれぞれの距離感が縮まりました。

コラージュ作品



また、受講後は、必ず「振り返り用紙」を記入していただき、その日の講座で「学んだこと」「感じたこと、思ったこと」「聞きたいこと、質問したいこと」の三点について記入していただきました。この振り返りは、「考えること」「発信すること」「返答について考えること」が繰り返し行われたことで受講生の学ぶ姿勢に好循環が生まれたと思います。

振り返り用紙 例：職場見学振り返り発表会の編



オープン講座で行った「仕事人に聞く」の講座では、実際の職場での場面を取り入れた質問についてグループワークを行いました。多くの意見や発言の機会を作れたこと、「消費者センターの出前講座」での電話詐欺の話や「中ポツの講座」の働くために知っていた方が良かったこと講座も受講生の評価が高かったです。



「仕事人に聞く」講座

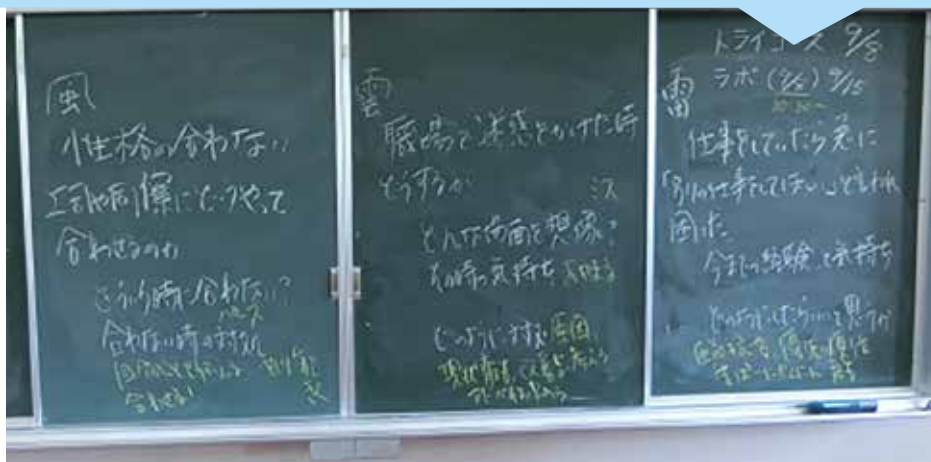


中ポツ講座

職場で体験したことや、最近あった出来事を発表する機会では、それぞれが苦労した話などが話され、同じような体験を持つ方がいたことで共感できたり、お題に合わせグループワークを行ったことは、改めて考える機会となったなど、感じたことが多かったことを振り返り用紙で知りました。

お題

- 1、性格の合わない上司や同僚にどうやって合わせるのか。
- 2、職場に迷惑をかけた時はどうする？
- 3、仕事をしていたら急に「別の仕事をして欲しい」と言われ困った。



企業調べでは、それぞれ悩みながらも、自分が見学したい企業のことをインターネットを使いながら調べ、発表シートの作成、個々に発表を行うことで発信の練習とパソコンの使い方を学ぶことができました。

職場見学は一種のリハビリ（社会見学）として行くことができました。非常に積極的に企業の方に質問をしたり、メモを取る姿がみられ、働く意欲へとつながりました



働くことに意識が向いたところでの、「Donald・E・スーパーの14の労働価値観」は、自己の労働意欲について掘り下げる機会となりました。講座だけでは足りず、後日、補講を行うことにまでつながり、自身の労働への価値観が何から発生しているのかをしっかりと考えることができました。

私の取扱説明書を作成しました。自分自身の特性を把握し、それを他者に適切に伝えることで、生きづらさを解消する手助けとなり、働きやすい職場環境づくりなどに役立ちます。自分自身をもう一度深く見つめ直す機会となったと同時に、職場見学を行った後の講座で取り組んだことによって、履歴書や職務経歴書の作成にもつながるものとなりました。

私の説明書（例：一部記載）

1. 私のスペックについて、自分の六感を通じてできること・できないことを説明します。

2. 私の六感スペック

耳…多人数が会話している場面は苦手です。 手足…綿でできた服が好きです。

脳みそ…会話中の話題が途切れて、何も浮かばず不安になることがあります。

口…肉が好き、こだわりはありません。 鼻…金木犀の匂いが好き、魚の匂いは嫌い。

目…文字情報オンリーは絵が浮かばないのでもどかしくなります。

企業向け雇用啓発研修会での発表に向けた準備では、初めてパワーポイントを使う方も多数おり、新たな学びとなったのと同時に、学んできたことを振り返るとても良い機会となりました。それぞれが、「ブリッジスクールで学んだビフォーアフター」を真剣に考え、答えを探すため真剣に悩み、考えることができました。研修会で発表できた方が、大きな自信を得たこと、自分の力で乗り越えたことへの誇りを持たたと実感しました。

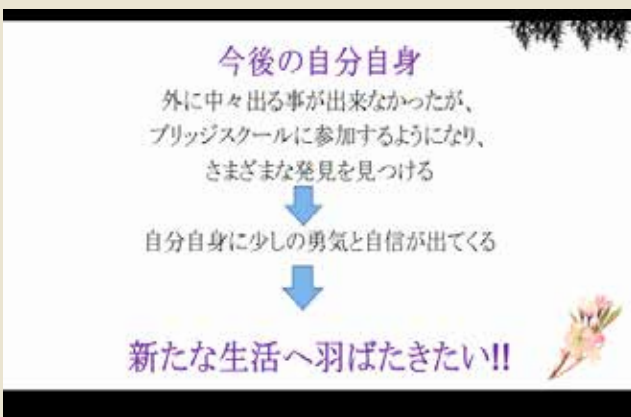
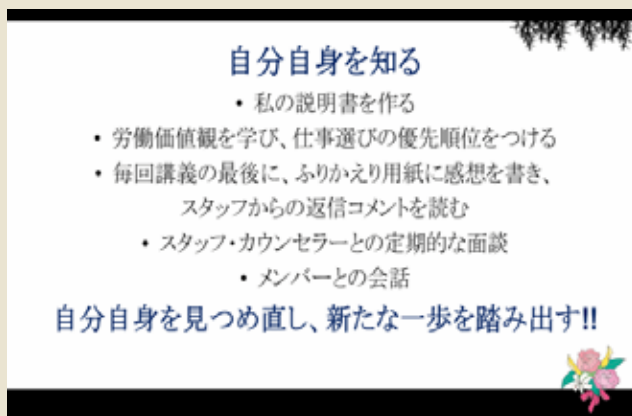
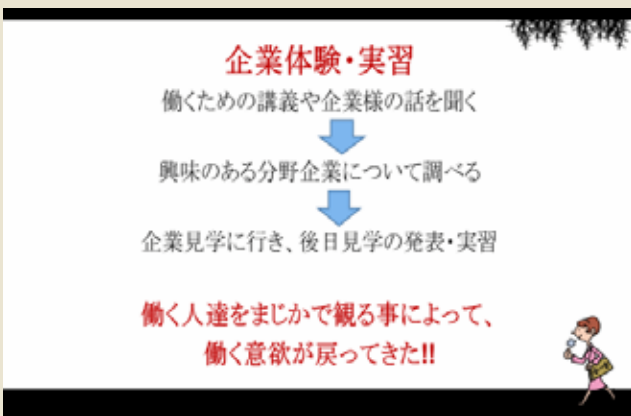
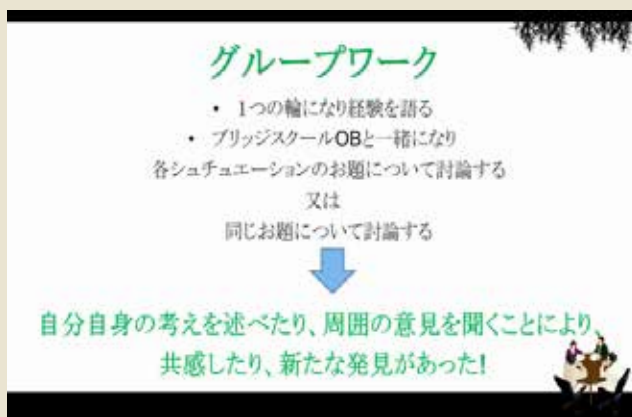
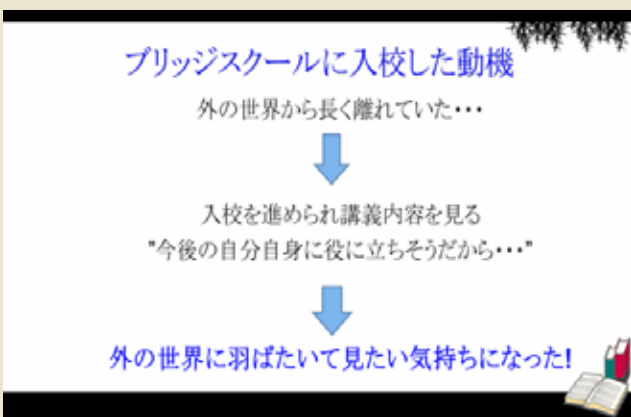
・受講生が制作したパワーポイント

今年度(4期生)の魅力を感じた講座

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん
社会マナー							
コラージュ				●			
他己紹介(自己覚知)							
総論と生活	●						
税と年金	●						
人間関係の体験談	●				●	●	
職場の人間関係	●	●			●	●	
企業の方から話を聞く	●	●	●				●
職場見学下調べ			●	●	●		●
職場見学振り返り				●	●		●
十四の価値観				●	●		
私の取扱説明書							
パワーポイントの作り方							
研修発表準備							



・Kさん



パワーポイントの発表をする受講生

・Tさん

来ようと思った理由

- ☑ 人付き合いを上手くしたい
(話をしに行っても内容がよくわからないと言われた)
- ☑ 仕事を探さなければいけない
(就職試験に相次いで落ちていた)
- ☑ 北杜市に縁がある
(高校と専門学校があった)



プログラムを通じてできるようになったこと

- ☑ 書いて考える癖がついた ex. 講座の中では「振り返り用紙」を書くことも含めて書いて学習する機会が多かった。
- ☑ 復習を通じた手段の選択を行える ex. 講座の最後に書く「振り返り用紙」を読み返して、アイデアを得る。
- ☑ 「私の説明書」で自分の根幹を知れた ex. 自身の行動の仕方の理由や苦手を明確にすることができた。

私の現在とこれから

- ☑ 埼玉の自動車部品メーカーを受け、最終面接に落ちました。
- ☑ 県の臨時職員の募集から面接を受けてみようかと画策しております。現在、初めて最終面接まで進んだことを励みにして奮闘中。



真剣にパワポを作る受講生

・Yさん

ブリッジスクールを経て ビフォー

- ・参加する前はブリッジスクールには「トライコース」と「つどいコース」があることを知りませんでした。
- ・私が参加した理由は、両親の勧めによってでしたので、それぞれにどのような問題や事情を抱えた人たちが参加しているのかなどは想像もしていませんでした。

理由 なぜならば

- ・可視化されない個人個人の問題に対して向かい合ったり話し合ったりする人たちとの出会いがなかったり、機会や場なども見つけたりすることも難しかったからです。

具体例 ブリッジスクールでは

- ・トライコースでは、講師や1期生から3期生も交えて、各自の体験談、失敗話、トラブルに対する経験などを発表しあいました。
- ・自分ならどのように振舞えるかなどおのおのの立場や振舞いについて考えを深めるような機会も得られました。
- ・また職場見学を通じて、さまざまな立場の人たちの受け皿としていろいろな働き方を模索していることもわかりました。

アフターと今後

- ⇒ ブリッジスクールのトライコースは、半年間当事者たち同士でも話し合い、向き合う体験でした。
- ⇒ それを振り返る今回のプレゼンテーションを発表する機会を通じて、このような問題と社会側の受け皿とも繋がるための架け橋でもあったのだと思いました。

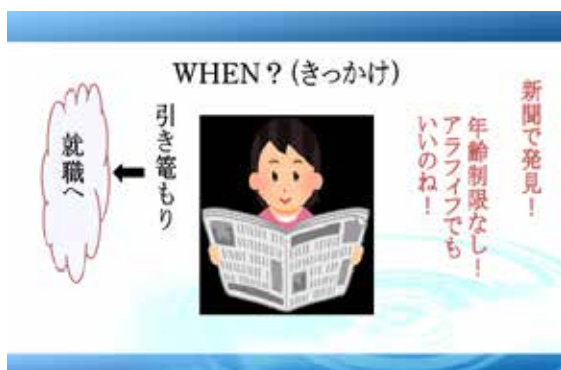
・0さん

「私が得たもの～社会復帰に向けて～」



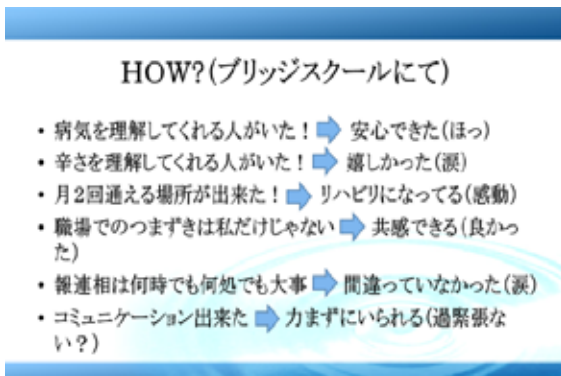
「皆様は不安障害ってご存知ですか？パニック発作ってご存知ですか？」

「不安障害は薬の服用だけで治るものではありません。しかし推奨されている認知行動療法を一人で行うには限界があり、そうこうしている内に6年近くも働くどころか、まともな日常生活を送ることができないでいました。」「皆さん知っていますか？リワークショップは会社に在籍していて復職を目指す人の為にあるんです。じゃあ私のような人には何があるの？」



「そんな時、新聞でブリッジスクールのことを知りました」「ブリッジスクールには何より私の苦しさを解ってくれる人がいました。そして職場での辛い経験を分かち合える人に出会えました。」

「なによりここでのコミュニケーションを通して、心と体のリハビリになりました」



「私は今、甲府にある会社の社長様のご好意で、週に1回2時間の職場実習をさせていただいています。有償ボランティアとして1時間500円で働いています。私の働きが、はたしてその会社の為になる仕事になっているかどうかわかりませんが…」

「車での通勤もハードです。錆び付いていた頭を使うのもハードです。時々大きな音がして怖いけど、優しい人の下、毎週こつこつとがんばっています」



「今のところ懸念していたパニック発作は起こしていません。今後もしばらくはこのペースでしか働けないと思います。でも少しずつ心と体の体力の向上を目指します。」

「いつか自立して一人で暮らしたいです」

平成 30 年度トライコース受講生

お名前	入校時	修了時
S・Oさん	在宅	有償ボランティアを経てアルバイトに
Y・Kさん	在宅	有償ボランティアを経てアルバイトに
K・Tさん	生活訓練	B型就労＋一般就労（障害者雇用）に向けて実習中
K・Nさん	在宅	福祉事業所（B型就労）
M・Nさん	短時間労働	短時間労働
T・Mさん	就労支援事業所	公務員（障害者雇用）内定
E・Mさん	A型就労	一般就労（障害者雇用）内定
T・Yさん	在宅	在宅

・検証

トライコースは開校当初は障害のある方、触法の方などを対象に就労を目指しビジネスマナーや、基礎学習を行うイメージで始まりました。しかし、年度を重ねるごとに、就労が難しい障害者手帳を持っていない方、いわゆる引きこもりの方のエントリーが増加していきました。

私たちは、地域のニーズの変化に戸惑いながら必死で対応してきました。社会では「発達障害」が大きく取り上げられるようになってきましたが、現実に苦しんでいる方々は繋がる場所が見つからず、社会の中で取り残されています。今年度の運営で離職を繰り返す方の中に発達障害が疑われる方がかなりの割合で含まれるのではないかと推察できました。

受講生の学習への意欲の強さ、また、社会復帰を願う気持ちと相反する自己肯定感の低さを実感しました。彼らの自己肯定感の低さは、社会で傷つけられ、心を病み、自分に対する否定感を強く植えつけられたことによるものが多いと感じました。他者と違うと感じたその時の違和感のまま生き、自分の居場所を失っていきました。



学びの継続

トライコースで仲間と出会い、共感し、認め合えた時の彼らの晴れ晴れとした表情は忘れられません。自分を深く考え、自己発信を認められ彼らは変化していきました。彼らからまだ学び足りないとの発信がされています。この気持ちがラボへと繋がっていくことになります。

女性の参加者が同年代だったこともあり、自然発生的に「女子会」が誕生♡♡♡
お茶を飲みながら、ゆっくりとスイーツを楽しみ他愛のないおしゃべりができる…そんな普通のことに憧れていました。笑顔が輝く、楽しい時間となりました。



・課題

本年度のトライコースの受講生は、まさに制度の狭間におられる方々でした。この方々を社会へとつなぐことができなければ、地域社会は益々寂れていきます。

自分と違う人を認め、共存できる社会を作るために、今できることを継続していかねばなりません。

障害のある方もない方も、生きづらさを抱えた方々が仕事をし、生活できる仕組みを、これからも探っていきます。

山梨県がクルマ社会であるため、運転ができない方のために駅までの送迎が必要でした。電車の本数も限られており、講座が延びた時などの対応が難しい状態でした。また、精神的に不安定な状態だと車の運転が難しいことから、その日の講座を休まれた方もおられました。



3、今後の方向性

トライコースは、ブリッジスクールとして地域で生まれる資源を活用し、地域に暮らす人々にとって有益となるような運営方針へと変化していきます。市町村との連携も視野に、地域に埋もれてしまっているニーズを掘り起こし、社会へとつなげるために、引き続き「自己を見つめ」「自己を磨き」「社会へ発信できる」人材を育てるべく継続した活動を続けていきます。



見学したい企業を調べました



好評だったグループワーク

4、本年度の事例（トライコース）

ケース1 Kさん

・ブリッジスクールに来るきっかけ

昨年度ブリッジスクール関係者からの誘いにより参加しましたが、自分の力で就職したいと本格的な受講はしませんでした。本年度になり、カウンセラーや主治医の勧めもあり受講することになりました。離職を繰り返しており、受講時は無職で自宅にて生活しています。

・ご本人の思い

「就職したい」との思いは強くありましたが、社会、会社から要求されることと、自分の得意な分野とのマッチングできず就労への一歩が踏み出せずにいました。自分が苦手とすることにアプローチしているトライコースのカリキュラムを見て参加しようと思いました。いずれは「就職したい」「家庭を持ちたい」との希望があります。

・生活歴

両親と三人暮らし。ご両親は協力的で見学等一緒に参加されていました。

・医療

精神科クリニックに月1回通院されています。抑うつ状態や過呼吸はありますが現在は服薬にて安定しています。

・現在の状況

8月よりトライコースを受講。仲間に過去の体験について共感してもらえたことで親近感が持て急速に仲間意識ができました。学習にも意欲的で、職場見学ができたことなどで就労意欲が高くなりました。11月より協力企業での有償ボランティアに参加。週1回、2時間のパソコン入力作業。超短時間ではありますが、生活リズムを整え、仕事のペースを保っています。

・今後

次年度については、職場実習の企業で引き続きの超短時間労働（ブリッジワーク）を継続し、アルバイトで働くことが決まりました。また、ブリッジスクールは、ご本人の意思により、ラボやオープン講座等で寄り添って行く予定です。



職場見学振り返り



企業実習で働く

ケース2 Mさん

・ブリッジスクールに来るきっかけ

ブリッジスクール関係者から、支援者を通じての声かけがきっかけでした。就労継続A型事業所にて働いていますが、ステップアップを考えていたことから自分を磨くために参加となりました。

・ご本人の思い

「一般就労をしたい」との思いがありましたが、どうしたら次のステップに繋がるか先が見通せなくなっていました。障害者雇用で就労したい会社があり、そこへ繋げて欲しいとの希望がありました。

・生活歴

グループホームにて生活。就労継続A型事業所にて働いており、生活も安定しています。

・医療

療育手帳をお持ちだが、医療は必要としていない。

・現在の状況

入校当初は、口数も少なく人見知りがありました。回を重ねるごとに自分の得意分野を発揮でき、生き生きと参加できてきました。職場見学は非常に熱心で、自分の就職したい会社をしっかりと見学しました。その後、ご本人より実習の希望があり、中ポツと連携し実習が実現。実習を受けたのち、採用試験にエントリーされ、1月の面接をしっかりと受け、2月に入り採用が決定しました。自分の希望する会社への道をしっかりとつかみ取ることができました。

・今後

4月より一般就労となります。今後は、ご本人の意思により、ラボやオープン講座等で寄り添って行く予定です。



ブリッジ・ラボ

～仲間と未来を描く～

1、活動の目的とプログラム

・活動目的

トライコース修了後にアフターフォローが必要な方や、さらなるステップアップのための学習が必要な方を対象とした、参加者の自主性を尊重した活動です。

地域の公民館活動や、調理実習、修了生を祝う会等、自分たちで参加したい企画や行いたい企画、話し合いたい内容を提案し、自分たちで準備検討し、運営しています。

基幹センターや相談支援事業所、生活支援事業所等、地域で暮らしている障害者の状況を良く把握している機関と密に連携して、情報を共有しイベント等への参加を促してきました。

公民館の運営団体やイベントの主催者とも意見交換し、ただ単に参加するのではなく、参加することの意味を共有し、参加しやすさを模索してきました（設備や伝え方のバリアフリー含む）。

地域で開催される公民館行事や地域のオープン行事等の地域活動への参加によって、地元の方やお祭り等に参加する方々と、様々な体験と交流が図れました。

地域行事への参加したことによって彼らの余暇の充実が図られるとともに、地元への参加意識や連帯感も高まることが期待されています。

参加を重ねることで、地域住民の方々と顔見知りとなり、信頼関係が構築されてきました。それにより地域の一員として受け入れられる地盤ができたと思います。少子高齢化が進む地域社会の中で、一定の役割を担う存在として認知され、頼りにされる共生社会の実現を目指したいと考えています。

コーディネーターは基本見守り役に徹して、参加者の自己発信と相互の意見交換による合意形成を促してきました。また、基本的に同一者が務めることで、参加者の個別ケースを把握した上で必要最低限のアドバイスを行いながら、一連の過程を通して、自己決定・自己実現に向けて様々なスキルが身に付くように配慮してまいりました。



お祭りを手伝うラボの受講生

2、活動の様子、検証、課題



清掃ボランティア

・プログラム

	ラボ（参加者 述べ 53 名）	地域活動（イベント名）
5 月	今年度の予定を決定	
6 月	人間関係 （経験に基づいた意見を出し皆でディスカッションを行う）	ホテルと尺八の夕べ
7 月	○×クイズ（トライコース合同） 職場の人間関係（8月のトライコースとの合同講座に向けて準備）	穴山町たなばた祭
8 月	トライと合同 （人間関係について発表する）	北杜ふるさと祭り（ボランティア） 清掃ボランティアとモーニングカフェ
9 月	8月の反省会 （人間関係についての発表の反省）	瑞宝太鼓演奏会
10 月	1月プレゼンについて （テーマ、誰に発信、方法、プログラム等）	さんま祭り
11 月	休み	生涯学習推進の集い・福祉と文化祭り 日野春學舎まつり
12 月	トライと合同（企業啓発研修での発表準備）	イルミネーション点灯式と音楽の夕べ
1 月	企業啓発研修会発表リハーサル 企業啓発研修会発表 企業啓発研修会発表の振り返り	初日の出を見る会
2 月	4 期生を送る会準備	料理教室
3 月	4 期生を送る会開催	移動学習会（研修旅行）

本年度のラボの活動は4つの目的がありました。

- 1、グループワークで、自分たちを高める活動を行う。
- 2、トライコースと合同で講座を行い、自分たちも共に成長する。
- 3、地域の活動に参加し、地域の方々と知り合うことで住みやすい環境を作る。
- 4、企業向け雇用啓発研修で、自分たちの思いを多くの人に向けて発表する。

・検証

- 1、グループワークで、自分たちを高める活動を行う。

本年度はトライコースと合同で行うことが予定されていたため、先輩として自分たちの意見をしっかりと出したい、講座の進行の役に立ちたいとの思いが感じられ、話し合いも熱心に取り組むことができました。

- 2、トライコースと合同で講座を行い、自分たちも共に成長する。

準備をしっかりと行ってきたため、合同講座の日には、トライコースの受講生を引っ張る役、率先して発言する姿を見ることができました。

- 3、地域の活動に参加し地域の方々と知り合うことで住みやすい環境を作る。

地域の行事に参加することができました。特に「北杜ふるさと祭り」では、出店の売り子役、出店物の準備、お金のやり取りまで任せていただき、暑さも気にせずハツラツと働く彼らの姿は自信にあふれていました。また、清掃ボランティア活動では、熱心に草取りを行い、地域の参加者よりも10歳以上若い彼らの働きは大勢の方に感謝の言葉をいただきました。その他の多くの公民館活動に参加し、地域の方に顔を覚えていただけるまでになりました。

- 4、企業向け雇用啓発研修で、自分たちの思いを多くの人に向けて発表する。

10月から発表の準備に取り掛かり、テーマ、誰に向けての発信なのか、どのような方法で発表するかなど、細かく考え、分担を決め、自分たちの方向性をそろえるための連携方法を考え、悩みながらも「自分たちらしさ」を発信できました。

トライコースを修了したばかりの彼らと、ラボで自分磨きと仲間との交流を続けてきた彼らでは、全く違うと言い切れるほど成長を遂げています。

他者の意見を聞き入れられなかった方が、自分の意見と擦り合わせられるようになり、言葉よりも行動になってしまった方が、行動する前に考えられるようになり、変化してきています。また、研修会での発表では、聴衆の前に出て自分の言葉で話す、皆さんに意見を聞

く、アドリブでのつなぎまでできるようになり、目を見張るものがありました。

発表の時も、トライコースの受講生のフォローもするなど、人として一回りも二回りも成長し、それらが職場での人間関係や、仕事面でも発揮できてきていることが伺われます。



トライと合同

• 課題

自発的に集まるグループなので、参加できる方と、お休みがちの方ができてしまっています。

現在所属している方々は皆男性なので、これから女性が入ってくることを考え、グループ分けを行うか考えていく必要があります。

本年度は、トライコースと絡めることが多かったですが、「自分たちの活動にもう少し力を入れたい」との声も上がってきているため、自主的な活動として話し合っ決めていきたいと思っています。

3、今後の方向性

本年度の彼らの成長を目の当たりにしたことで、ブリッジ・ラボの重要性は疑いのないものとなりました。更なる発展と、受講生の成長のためにも、内容を精査し、ニーズをくみ取り、継続・進歩していきたいと考えます。



話し合ったことは、板書し、LINEで共有

真剣に話し合う
ラボの受講生



つどいコース

～安心して集まれる場所の存在～

1、活動の目的とプログラム

・活動目的

主に“ひきこもり”の方を対象とした、社会参加のきっかけ作りを目的としたコースです。それぞれの事情を抱え自宅などに閉じこもりがちな方に対して、まず安心して過ごせる場所を用意し、スタッフや仲間と気軽に話ができる雰囲気作りを心がけています。そうした空間で少しずつ関係性を築き、参加できる自信をつけていき、やがては他のステージにつないでいくことを目指しています。

引きこもっていても、外出したい、友達が欲しい等「やりたいこと」への欲求は必ずあるのですが、実現につなげる方法や自信が無いために立ち止まっている方が多いのが現状です。本人発信に重点を置きながら、発信されたことの実現に向けて実行と精神面でのバックアップを行い自己肯定感の回復を目的としています。

仕事や、大きい人間関係など、社会とのつながりをうまく持つことがむずかしい人たちが**家族以外の人たちとのコミュニケーションを取り、社会や仕事など人とつながるお手伝いをする場、**になります

活動の場に来てもらうことをメインに、**余暇活動**を中心に行っています。



これまで長い間社会とうまくつながってこられなかった人たちにとって、外に出る、ということは大きな一歩になると思います。まずは無理せず、いろいろな人とゆったり関わりを持つことができる場を提供できればと思っています。

・基本的には、本人たちの希望に沿った活動を行いたいと思っています。

その中で『可能なこと』『不可能なこと』を考えていただく機会を作ったり、やりたいことを行うための過程を考えたり、スタッフもつどいに来ている人も一緒に考えることができる場にしています。

・本年度の予定は、調理を含むパーティー形式のもの、修学旅行の提案、ハロウィンやクリスマスなどのイベントを計画・実行することをメインに組み立てました。

2、活動の様子、検証、課題

・プログラム

参加者 延べ 70 名

	居場所活動
5月	お茶会
6月	コラージュ作成、スポーツ（バスケットボール、バドミントン、サッカー）
7月	楽しいことを計画する（旅行計画）、七夕たこ焼きパーティー、ハンドマッサージ
8月	かき氷、音楽コンサートの参加（地域の別法人で開催）
9月	楽しいことを計画する（夜のつどい計画）、個別ヒアリング（振り返り） ハンドマッサージ、カードゲーム
10月	夜のつどい、ハロウィンパーティーの計画、ハロウィンパーティー 夜のつどい実行（懇親会）
11月	楽しいことを計画する（旅行計画、クリスマス会）、カラオケ
12月	お茶会、クリスマスパーティー実行（ケーキ作り）
1月	旅行計画（諏訪旅行に決定）
2月	旅行計画（詳細についての話し合い）
3月	旅行

・活動の様子

- ・調理作業などのときは、まず買い物から始めています。

必要なものの確認、予算、買い物班のメンバーの決定などを自主的に行えるように場面の設定をさりげなく行い、受講生からの発信を待つようにしました。

- ・調理場面は、得意、不得意が現れる場面でもありました。得意な方には十分に力を発揮できるように任せる体制をとり、不得意な方にはスタッフが寄り添うことで楽しく参加できました。

- ・話し合いの場面では、意見の言える雰囲気、回を増すごとに出来上がりました。

・旅行は、イメージを持てる方が少なく、現実的な話になるまでに何回かの話し合いが必要でした。交通手段、費用、移動距離などに気づくまで、さりげなくご本人たちに話を戻すことで、現実味のある予定が立てられました。

必要な経験の場となりました。



ハロウィンパーティー



クリスマスケーキ



たこ焼きパーティー

・検証

現在「つどいコース」に来ている方々の多くは、学生時代に不登校を体験していました。
→不登校、つまり集団にうまく入れなかったという経験は、彼らの自己肯定感を傷つけてしまっています。

そこで、「つどいコース」では、まず、自主的に役割が持てるように、たこ焼きやかき氷などの調理、ハロウィンでの仮装など自分を変化させる等の活動をしました。

また、自分たちの意見によって構成される、旅行の計画、イベントの計画などを行い、考えること、意思を発信することを繰り返すことで薄紙を重ね合わせていくように自己肯定感を補強することができました。

受講生の中には、気持ちの波の激しい方もいるため、なかなか定期的に参加ができない方もいますが、1回で完結の活動をすることで休み明けの参加でも疎外感なく活動できるようにしています。

夜のつどいは、居酒屋での開催ですが、居酒屋に行くという経験がなく、参加して初めて、お酒を飲む機会と運転する行為が、社会的に相反するものと気づくことになったということもありました。

・課題

・活動開始から3年が過ぎ、活動内容は広がってきていますが、時間を持て余すような方も見られるなど、活動の見直しが必要となってきました。

・「何もしない」をコンセプトにしていますが、個々のスピードが違うため求めるものに違いが出てきています。

・ボランティアさんにご協力いただくことで社会との繋がりも広がり、個々への対応も多くなり、個人情報などの取扱い等ボランティアさんの方々の負担にならない方向性が必要となってきています。

・社会との繋がりが出てきている方、生活が変わらない方、福祉と繋がった方など多様になったことで、求めることに変化が見られるようになってきています。



3、今後の方向性

・社会への繋がりを求める方が増え、新たな受講希望者も社会性を重視する方が多いことから、トライコースやラボなど、より社会性の高いものへ移行していくように繋げていきたいと考えています。

4、本年度の事例（つどいコース）

ケース1 Mさん

・ブリッジスクールに来るきっかけ

引きこもり歴13年。ご本人の中から「このままではダメだ」との思いが沸き上がり、話を聞いてくれるところを探し出す行動に出たところでブリッジスクールにつながりました。

本人は「人と話ができる場所を知りたい」「自分を助けてくれる人を探している」等の思いがあり、市の基幹センターから、中ポツを経由してブリッジスクールを紹介され訪ねていらっしゃいました。つどいコースの受講生として月に2回の講座に参加を始めました。その後も、衝動的に外出している動きが見えたことから、居場所としてブリッジスクールの有償ボランティアにて週2回の作業を行うため、当法人に来所されています。

・ご本人の思い

環境を変えたい（家から出たい）。家族と離れたい。知恵をつけたい。社会性をつけ行動したい。適切な本を読みたい。規則正しい行動がしたい。思い通りに行動したい。人に教えられる人間になりたい。アルバイトしたい等、多くの希望があります。

・生活歴

高校1年から引きこもりになりましたが、その後、通信高校を卒業したり、支援を受けられる所に行ったりするも上手くいかなかったようです。現在は自宅にて過ごし、バイクの免許を取得したことで買い物や図書館等決まった場所には行けるようになっています。

昼夜は逆転気味であり有償ボランティアの時間にもバラツキが見られます。ご両親に対して負の感情がある様子が言葉から伺えました。

・医療

16歳の時に心療内科を受診した経験がありますが、繋がってはいません。

病院受診に関し、基幹相談、市の福祉課、中ポツ、ブリッジスクール担当などで話し合い受

診を勧めることで一致、基幹相談を中心にご本人とご家族に話を勧めました。H30年10月に受診。検査結果を受け服薬を開始したがゆっくりとした状況。配慮ある社会参加の機会が必要という診断を受け、福祉の利用を検討。就労移行支援事業所の見学を開始しています。

・現在の状況

つどいコースも有償ボランティアも、忘れなければ来ることができますが、うっかり忘れてしまうこともあります。また、有償ボランティアの日以外は昼夜が逆転している傾向があるため時間のバラツキもあります。有償ボランティアはシール貼り、味噌のパック詰め、パソコンへの入力等を行っています。作業は細かい点に配慮を必要としますが、確実にステップアップしてきています。パソコン入力は得意分野であり、集中して作業ができています。

服薬については、ゆっくりですが生活に入ってきています。ご両親との関係性も穏やかになり年始には一緒に外出し楽しむこともできました。

・今後

福祉につながったことから、相談支援専門員も決まり、就労移行支援事業所の見学から利用へとつながっていくことと思われます。ブリッジスクールは、ご本人の意思により、ラボやオープン講座等で寄り添って行く予定です。



有償ボランティア作業中

ケース2 Rさん

・ブリッジスクールに来るきっかけ

昨年度よりブリッジスクールを受講（昨年はトライコース、本年はつどいコースを受講）。就職と離職を繰り返していたことで、引きこもりになりたくないとの意思からブリッジスクールを受講。受講の中で企業見学はしましたが、企業実習や病院受診を打診しても繋がることなく、暫く離れていました。12月に同居していた家族が緊急入院となり、生活の不安から連絡がありました。生活のほとんどを家族に頼っていたため、個人での生活に限界があり、急遽、自費にて福祉サービスを利用し、グループホームでの生活、ブリッジスクールでの有償ボランティアで作業をすることになりました。

・ご本人の思い

以前は「就職したい」との思いが強くありました。しかし、自分の苦手とすることと社会、

会社から要求されることの狭間で悩んでいました。今回の状況に直面し福祉の力を借りなければ「明日からの生活が困る」「自分の未来が描けない」との思いに至りました。今回は手帳の取得から始まる福祉の利用を希望されての連絡でした。いずれは「自立したい」「就職したい」「一人暮らしがしたい」等の希望があります。

・生活歴

家族と二人暮らし。趣味を楽しんだり、外出も自由にできる環境が整っていました。日常生活のほとんどは家族を頼りとしており、家事等も任せきりでした。

・医療

6年前に精神科クリニックを1回のみ受診されていましたが、その後は特にないままでした。今回は、まず、市の基幹センター、福祉課に繋げることから始め、家庭状況の確認（年金、税金等）を行い、必要な手続きを行いながら、受診の手続きを進めました。受診し、検査を行ったことで、福祉が必要との判断となり計画相談支援専門員へつなげることができました。

・現在の状況

2月より福祉サービスの利用開始となり、正式にグループホームの利用、就労継続B型事業所の利用が始まりました。その間、ご本人の不安に寄り添い、面談、メール、電話等の対応をしてきました。初めての世界に戸惑う気持ちと、これからの不安を分かち合い、一歩ずつ階段を上がるようにしてきました。また、ご家族とのパイプ役にもなり、情報の共有化を行い、ご家族の福祉に対する思いを聞き、丁寧に説明を行ってきたことで、ご家族の理解が得られ、ご本人の進む方向をバックアップしていただけることにつながりました。

・今後

計画相談支援専門員や、就労継続B型事業所、生活支援事業所等と連携を図りながら、ご本人の支援の軸を福祉サービスに委ねていく。また、ご本人の意思により、ラボやオープン講座等で寄り添って行く予定です。



昨年の企業見学の様子



つどいコースに参加

有償ボランティア

～ブリッジ・ワーク（中間的雇用）～

目的

一般就労を希望し、意欲はあるものの、障害特性への配慮がある職場が見つからなかったり、本人に自信がなかったり、また通院をしていて仕事の制約を受けているという方に対して、有償ボランティアという形式で、少額（時給 500 円程度）の対価を発生させ、中間的雇用として受け入れることをしました。当法人の農業部門、事務局や企画事業部が受け入れ先となり、本人の希望や特性に応じた仕事の切り出しを行い、時間や出勤日数も調整しながらスタートし、様子を見ながら順調であれば徐々に枠を広げていくようにしました。まずは本人が少しずつ経験を積むことで自信をつけ、やがてやり甲斐を感じてもらえるよう配慮をしていくことに重点をおきました。慎重に時間を掛けて進めることで、仕事ができる心と体の準備をしっかりと整え、次のステップであるアルバイト、パート、やがて正規雇用へとつなげていくようにしました。

背景

昨年度までに、トライコースから有償ボランティア（約 6 ヶ月）を経験した上で、現在当法人の非常勤職員として働いている方が 1 名います。また、つどいコース受講生では、昨年度から継続して有償ボランティアを行っている方が 1 名います。受け入れに当たっては、各現場での理解と「ブリッジスクール」担当者との密な連携が必要であり、受け入れ人数は限られますが、この仕組みによって始めて就労が可能となったケースもあり、引き続き取り組んできました。

検証

本年度の有償ボランティア

利用人数：7 名

利用時間：1 日 2 時間～ 4 時間

利用日数：週 1 日～ 4 日

有償ボランティアの活動は、利用された方々にとって大変有益なものでした。働きたいが経験がないためにイメージが描けない方や、精神面で超短時間労働しかできない方など、就労を考えるにあたってハードルとなる部分を、少しずつ下げることでできる仕組みであると実感しました。

本年度は、当法人での活動だけでなく協力企業様の力をお借りし、実習という形で二人の方が企業にて有償ボランティアの活動を行うことができました。



チャレンジワーク

～たのしく仕事を体験しよう～

目的

チャレンジワークは、文科省の事業ではありませんが、ブリッジスクール誕生後、もっと早い中高校生の段階で「生きづらさ」を感じている方々にアプローチできる方法はないかと考え生まれた活動です。

対象者

中学生で支援級に所属されている方、高校生では一般高校、通信制高校等に通っている方を中心に、支援学校ではない方たちに声かけを行っています。

活動

本年度で3年目を迎えました。

基本の活動は、夏休みと冬休みに学習と職場体験を行っています。1,2年目は基礎学習として、当法人の農場やお菓子などを作っている工房、一般のお客様をお迎えする飲食店での働く体験をしていただきました。また、座学も行い「働くってどんなこと？」や「働くために必要なこと」などのパワーポイントで学習を行いました。



世の中にはどんな仕事がある？



飲食店での実習



千石を使って小麦の選別作業



お菓子は計量が大切

本年度は、夏の活動では、役に立つ実感が持てる活動として、当法人のお菓子作りをするための、ミニシフォンケーキの試作と販売によるアンケート調査を行いました。

2種類の小麦粉（当法人で栽培したもの）を使いミニシフォンケーキを作り、どちらの方が好みかを調査しました。

調査結果をお菓子の製造を行っている事業所と共有することができました。

冬の活動では、ゼラチンと寒天を使ったゼリーを数種類作り、その特性や食感の違い、用途の違いについて学びました。食べた時の違いの大きさ、固まる過程の違い、使い方の違いなど、多くの点に気づき発言することができました。

また、「働いている人に聞いてみよう」の講座も開催し、警察官、消防士などの専門職の方から、話が聴けて、質問もできる機会を設けています。ドラマと本当の違いなど、おもしろく、知ってビックリな事実を教わりました。



ミニシフォンケーキ作り



ゼラチンと寒天 どっちが好き？



働いている人に聞いてみよう講座

検証

対象者はほぼ5～6名で推移していますが、一度参加すると、その後も継続して参加される方が多いです。知らない人とも仲間となり、繰り返し参加することで友情も生まれ、楽しく会話したり、ゲームをしたりしています。

物を作る喜びや、人の役に立つ喜びを知ることで、自己肯定感のアップと将来への期待感を育むことができます。「継続は力なり」と感じています。



雇用啓発研修

～なるほど！ブリッジスクールのあれこれ～

目的

精神障害者雇用義務化、法定雇用率の水増し問題など、多様な人たちの活躍の場や共に働く社会の実現に対し、障害者雇用の拡大に向けご尽力されている地域の企業ならびに事業所の皆様に、ブリッジスクールの活動について情報提供を行い配慮ある働き方や短時間労働のあり方について提案し、広く雇用の啓発を図る。また、当事者が自ら思いを語る機会を設け、当事者の成長も促す。

主催：社会福祉法人八ヶ岳名水会 ブリッジスクール運営委員会

対象者：一般企業の方、福祉関係、教育機関進路指導者、就労支援者、
引きこもり支援者、当事者、関心のある方など

参加者：45名

実施日時：平成31年1月16日（水）13：00～15：30（受付12：30～）

実施場所：韮崎市民交流センター NICORI（韮崎市若宮1-2-50）

研修内容：

（1）学びの発表会

I 『つどいコース』ってどんなところ？

II 『トライコース』で学んで ～変わったこと、思ったこと～

発表者：ブリッジスクール トライコース 4期生

コーディネーター：戸田達昭（ブリッジスクール講師 ヴィジヨナリーパワー株式会社代表取締役）

III 『ブリッジ・ラボ』障害者雇用で働いて～活動の様子とそれぞれの悩み・思い～

発表者：ブリッジスクール修了生、ブリッジ・ラボで学ぶ方々

コーディネーター：石垣悦子（ブリッジスクール講師 コネクト創造社 代表）

（2）トークセッション

『ブリッジワーク』 ～“働く”への気配りから仕事の切り出しまで～

パネリスト：戸田達昭、小泉晃彦（ブリッジスクール 校長）

コーディネーター：石垣悦子

研修内容

学びの発表会では、これまでのブリッジスクールでの取り組み（つどいコース、トライコース、ブリッジ・ラボ）をスタッフや受講生が説明しました。

トライコースについては、講座内で作成したパワーポイントを用いて受講生自身が発表を行い、自分たちが何に困ってブリッジスクールに通い、それによって自分たちがどのように変わったのかをプレゼンテーションしました。

ブリッジ・ラボは、年度の初めに「実際に就職して働く中で、自分たちが体験したことや感じた思いを発信して社会に問い掛けたい。」という意見が受講生から出ま


した。そこで、10か月をかけ受講生たちが企画立案を行い、「障害者雇用、どうでしょう？」と題した参加型のプレゼンテーションを行いました。

「仕事が遅い！」「のろま！お前は飯を食うことだけは一人前だな」等の暴言を受けたことなど辛い体験や、「豚汁を作ってくださいと頼まれたので作ったら、本来作るべき量の3倍も作ってしまった。もっときちんと確認すべきだった」との少し笑える失敗談など、実体験を交えながら、障害者雇用の現実と可能性について語り、出席された皆様と一緒に考えました。

青赤黄の3枚のカードを事前にお配りし、「あなたは障害のある人との仕事がうまくいってる（うまくいく）と思いますか？」「あなたは、障害のある方と一緒に仕事をすることについて、どんな印象を持っていますか？」といった問い掛けを行い、参加者を巻き込みながら積極的な意見交換を行いました。

企業様・福祉事業者様向け
雇用開発研修会

なるほど！



ブリッジスクールのあれこれ

ブリッジスクール開校より4年、新しい働き方の提案

合理的配慮・短時間労働を考える・・・

多様な人たちの活躍の場や共に働く社会の実現に向けて、配慮ある雇用を検討している企業皆さまへ
一般就労へ送り出す福祉事業者の皆さまへ、新たな働き方『ブリッジワーク』をご提案。
不安を抱えながらもブリッジスクールで学び始められた方々が、自分の体験を語られます。
様々な視点で就労についてのヒントを持ち帰っていただければ幸いです。

平成31年1月16日(水)

場 所：重慶市民交流センターNICORI 1階 会議室5・6・7
(重慶市若宮1-2-50)

時 間：13:00～15:30 (受付 12:30～)

対象者：一般企業の方、福祉関係の方、教育機関進路指導ご担当者、就労支援者
社会との繋がりをもちにくい方を支援している方、関心のある方。

定 員：70名

内 容

I 学びの発表会

1、ブリッジスクール 『つどいコース』ってどんなところ？ 13:10～

2、ブリッジスクール 『トライコース』で学んで 一感じたこと、思ったことー 13:30～
発表者：ブリッジスクール トライコース ～4期生作成資料発表会～
コーディネーター：ブリッジスクール講師 ヴィジョナリーパワー株式会社 代表取締役 戸田達昭 氏

3、『ブリッジ・ラボ』 障害者雇用で働いて一活躍の様子とそれぞれの悩み・思いー 14:10～
発表者：ブリッジスクール修了生、ブリッジ・ラボで学ぶ方々 受講生の生の声が聴けます☆
コーディネーター：ブリッジスクール講師 コネクト創造社 代表 石垣悦子 氏

II トークセッション 15:00～15:30
『ブリッジワーク』ー “働く” への気配りから仕事の切り出しまでー
パネリスト：ヴィジョナリーパワー株式会社 代表取締役 戸田達昭 氏
：社会福祉法人 ハケ岳名水会 ブリッジスクール校長 小泉寛彦
コーディネーター：コネクト創造社 代表 石垣悦子 氏

【お問い合わせ】
社会福祉法人ハケ岳名水会ブリッジスクール運営事務局 (窪川・相吉・橋本)
〒408-0025 山梨県北杜市長坂町長坂下妻1237-3
電話：0551-32-0035 FAX：0551-32-6351

文部科学省委託事業
『障害者の多様な学習
活動を総合的に支援
するための実践研究』

主催：社会福祉法人ハケ岳名水会ブリッジスクール運営事務局
後援：山梨労働局 北杜市 韮崎市 山梨県中小企業団体中央会 一般社団法人MtFujiイノベーションエンジン

受講生が発表したパワーポイント（一部）

●コミュニケーションや人間関係で「生きづらさ」を抱えている方々の事例

- ☆二つ以上の物事を同時に処理するのが苦手。
- ☆指示語(※「あれやって!」「それを先に!」等)を誤解してしまうケースが多い。
- ☆言葉だけで指示されると理解しづらい。
(※マニュアルや図面があるとわかりやすい)
- ☆指示→頭でイメージ→体に命令→動作に移すこの動きに時間がかかる。

二人具体例

質問③

あなたは、障がいのある方と一緒に仕事をするということについてどんな印象を持っていますか？

- 本人の苦手分野や特性をカバー、しっかり仕事をしてくれる。
- 何をするかわからないので、いつも隣にいてあげる必要がある。
- その他。

質問④

あなたは、障がいのある方は、治療や努力により、環境に適応したり成長できると思いますか？

- できると思う。
- できないと思う。
- わからない。



あるある体験談

① 人間関係や仕事で辛かったこと、悲しかったこと。

- ☆苦手なことやできないことを「怠けている」「やる気がない」ととらえられる。
- ☆職場内でいじめにあった。
- ☆苦手な業務をしているときに「遅い」と怒られた。
- ☆障がいがあること、障がい者雇用を探していることを周囲の人に明かせない。

二人事例

質問⑥

生活習慣病の人、子育て中のママ、外国人労働者、病気から職場復帰した人などと一緒に働くことで、あなたの働き方は大きく変化しましたか？

- 変化した。
- 変化しない。
- わからない。



配慮ってどんなところ？

～配慮があると働きやすい人が増えています～

- たとえば…
- ☆子育て中のママが時短労働を申請したら…
- ☆外国人労働者が日本の言葉や文化の理解が必要だと知ったら…
- ☆生活習慣病の方が食事に気をつけていると知ったら…
- ☆障がいの特性や、苦手・得意分野を知っていたら…
- ☆指示が、文字や絵だとわかりやすいと知ったら…

「配慮」という言葉が多く出されたことは事実でした。しかし、彼らの働く現実決して生易しいことばかりではなく、辛いことも多くありました。この発表に中で、参加者の中から「お互いさま」の気持ちや行動、「思いやりの心」がどんな職場にも、また障害のある方との仕事にも必要ではないかのご意見をいただき皆領いていました。

トークセッションでは、八ヶ岳名水会の常務理事である小泉晃彦ブリッジスクール校長は福

社の観点から、障害のある方の就労、障害認定はされていないが生きづらさを抱えている方の就労について事例を交えながら実状を話しました。一方、戸田氏は雇用する側の観点から、そうした方を雇用する上で、どのような環境面の配慮が必要なのか、具体的にどこまでの配慮なら可能なかを話してくださいました。

両者の対話から、個人の特性に応じた柔軟な配慮と仕事の切り出しを行うことの重要性と同時に、個人の特性と会社の事情をつないで調整できる人材の必要性が浮かび上がってきました。

実施状況

ブリッジスクールの受講生の発表を主に考え、当事者からの声を届けることによって、配慮ある働き方について改めて考えていただく機会となりました。また、一緒に歩んできたブリッジスクールの講師の方々が関わり、発表の内容をわかりやすく伝えることで信頼関係も感じていただくことができました。発表内容によって、ブリッジスクールが大切にしている「発信力」についてのご理解もいただけたと感じています。

トークセッションでは、配慮ある働き方の切り出しについて実際に受講生が働いている会社からも話が聞けたことはイメージの共有になりました。

発表を通じて、資料作りから発表の準備までの間に、多くの受講生が自分を客観的に見つめ、自己分析を行うことで大きく成長しました。

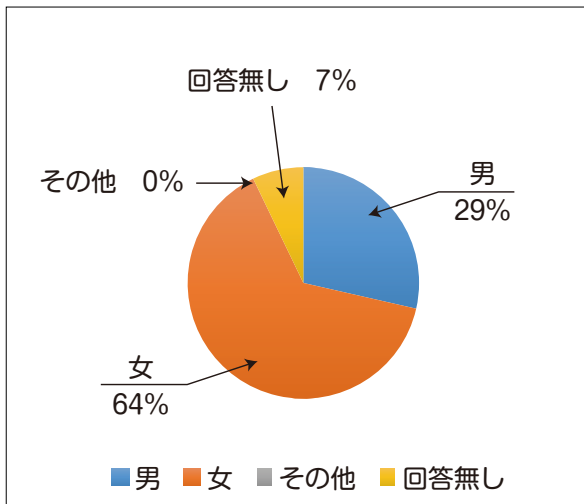
社会での理解と自己の思いの実現には、距離はありますが確実に歩み始めた受講生をさらに応援できる研修会となりました。



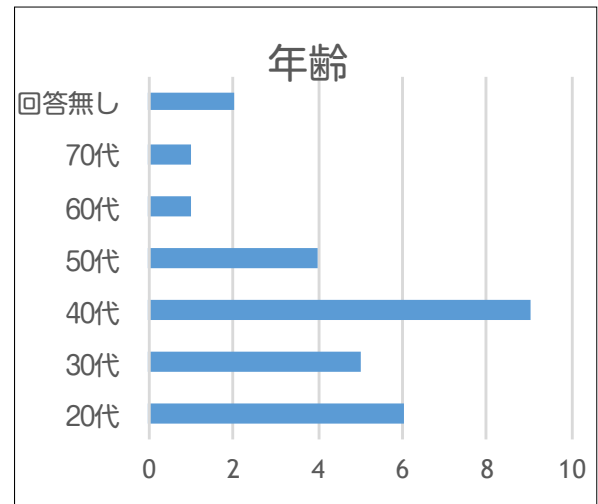
～なるほど！ブリッジスクールのあれこれ～アンケート結果

アンケート総数：28枚

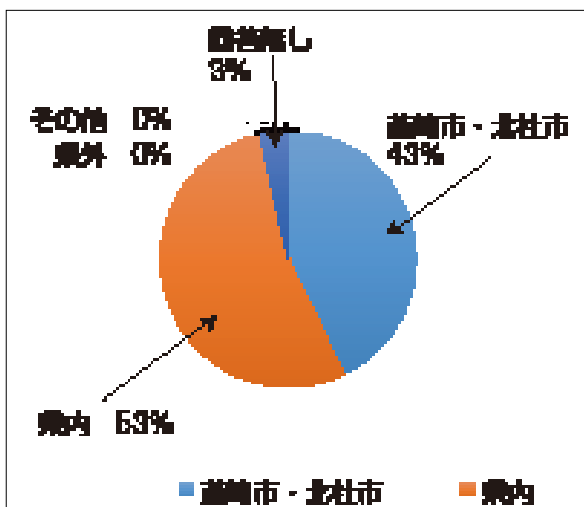
【質問1】性別



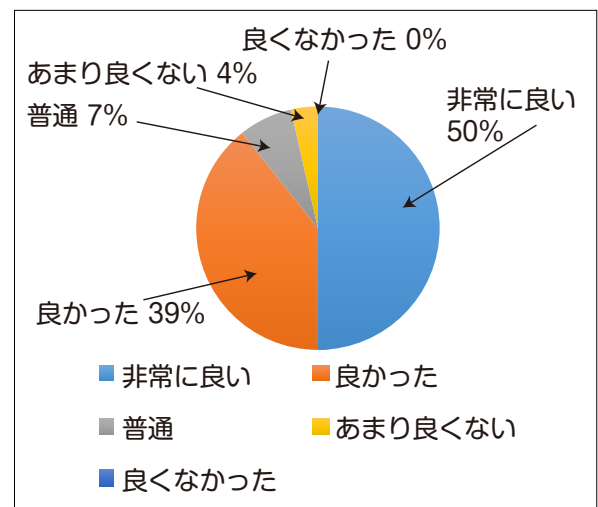
【質問2】年齢



【質問3】来訪地



【質問4】研修内容



印象に残ったもの

- ・受講生自身の言葉、頑張って準備したことなど。(5件)
- ・当事者本人が困っていることを発信しなければ周囲の人は何を手助けしていいかわからない、その術をブリッジスクールで学んでいること。
- ・「人との繋がりはやはり大切だ」ということ。
- ・コンセプトが伝わりやすいし入り込みやすい。
- ・一步を踏み出すことの大切さ。
- ・ラボの発表
- ・小泉校長、石垣さん、戸田さんの三者対談

感想、意見など

- ・ 社会において居場所がないと感じひきこもって果ては自殺してしまう若者がいるなかでこのような若者の新しい居場所を見つける事業は必要不可欠だと感じました。
- ・ 境目は大きいものだと思う。しかしギブアンドテイクは可能だが理解者でなければ通じない、そのための発信が必要になると感じました。
- ・ 障害の有無に関わらず、自己肯定感を持たずに何をしたらいいか、どうしたらいいのか、自分が分からず迷い込む方が多いように感じます、生き方や自分を知って経験を積むことの大切さを日々感じています。



検証

- ・ 来場者の4割が、「菫崎市、北杜市」と活動を行っている地域となったことは、活動への理解が進んできているということと考えられます。また、県内の広い地域からの参加者があり、ブリッジスクールの取り組みは、これからの社会の進むべき道に繋がっていると感じました。
- ・ 「非常に良い」とのご意見が50%もいただき、「良かった」とのご意見を含むと全体の9割となったことは、受講生に大きな自信と励みをもたらす結果となりました。
- ・ 福祉関係者の出席が多く、企業様になかなか足を向けていただけない現実も受け止めなければならないが、4回目を迎えた「雇用啓発研修」に今まで繋がりのない企業様が参加したことは大きな一歩となると確信しています。
- ・ 緊張感に張り詰めていた発表者が、発表が終わり感激と安堵から泣き崩れる場面もあったが、乗り切ったことの証であり、この研修会が良いものを生むことができたと感じています。

アンケート事業

目的

・山梨県内の当事者、保護者、支援者・教育関係者の3者にアンケート調査を行い、学びや生活を豊かにする活動についての、現在の状況や意思、将来について聞き取りを行うことで、学びや活動のニーズを把握し、これからの時代に必要とされるものを探すことを目的として行いました。

実施状況

・アンケート配布先として、県内の約70の障害福祉の事業所、基幹センターなど県内の約15の福祉行政関係、県内の6校の特別支援学校にお願い致しました。各箇所へは、当事者、保護者、支援者・教育関係者、の3者に3名ずつを基本としてお答えいただきました。当事者の方には事業所などから手渡していただき、他者の意見が入りにくいように配慮いたしました。

・当事者、保護者、支援者・教育関係者など計850通のアンケート調査用紙を送り、364通の返答をいただくことができました。「学び」や「生活を豊かにする活動」への参加状況や参加意思、目的、満足度、将来についてのご意見をいただきました。

・上記3種類のアンケート結果を集計し、連携協議会などに報告して意見集約を行いました。併せて、トライコースなどの講座活動での成果とすり合わせを行いながら、障害者の多様なニーズに対応できる学習プログラムの構築に繋げていけるようにしたいと考えています。

・アンケートの結果を連携協議会の方々と共有し、ご意見をいただき検証を行いました。

1、アンケートの作成

・まず、予備調査として、法人内で「当事者」「保護者」「支援者」から記述式アンケートをとり、その結果から本調査用アンケートを作成しました。(10月)

・予備調査では、「学び」と同時に「活動」にも重点が置かれていることが分かりました。そのため、「学び」のみではなく「生活を豊かにする活動」についても聞くことのできるアンケート用紙を作成しました。(12月)

2、アンケート用紙

<当事者用>

アンケート調査ご協力のお願い

アンケート用紙を受け取られた皆様へ
このアンケートは、今年度、ハツ岳名水会が文部科学省より採択された「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」(以下、「この研究」という)を進めるために、**障害のある方の学びの場や社会体験の実状や希望**を調べることが目的として行います。
以下の説明を読んだのち回答していただけますよう、お願い致します。

・**氏名は書かないでください。**

・ご記入いただいた内容は**この研究だけに使用します。**

・質問に正しい答え、間違った答えはありませんので、思った通りそのまま記入ください。

・アンケートへの回答は強制ではありません。回答したくない場合、回答しなくても良いです。

・アンケートへ回答していただければ、この研究へ協力していただけたと**考えます。**
お手数ですが、この研究へのご協力をよろしく申し上げます。

この質問紙は、表紙も含め4ページあります。
回答していただく前に乱丁・落丁がないかご確認ください。
ページが抜けている場合、新しいものと交換致します。

本研究に関してご意見、ご質問などがございましたらこちらまでご連絡ください。

実施責任者：社会福祉法人ハツ岳名水会
ブリッジスクール校長 小泉康彦
住所：山梨県北杜市長坂町長坂下条 1237-3
電話：0551-32-0035
E-mail：bridge@y-meisui.or.jp

1

【質問1】あなたの性別・現在の年齢をお答えください。

性別 (男 ・ 女) 年齢 () 歳

障害別 (知的、 身体、 精神、 難病、 発達)

【質問2】あなたの『生活が楽しく、豊かになる活動や学び』について、以下の質問の答えの当てはまるものに○をつけてください。

1. あなたが**いま楽しくやっていること、学んでいること**はどれですか？
(○はいくつでも良いです)

・趣味(好きなこと)の活動 ・パソコン教室など勉強の活動 ・飲み会
・食事会 ・ゲーム ・アニメ ・マンガ ・読書 ・映画鑑賞
・携帯電話の使い方教室 ・コンサートなどのイベント ・買い物
・芸能人のファン活動 ・料理教室など ・資格取得の勉強 ・デート
・お祭りなど ・その他 _____

2. 「楽しい活動や学びの場」があることを知っていますか？
(知っている ・ 知らない)
→ 6.へお進みください

3. 2で知っている**と答えた方**に聞きます。
あなたは、「楽しい活動や学びの場」に参加していますか？
(参加している ・ 参加していない)
→ (活動の名前： _____) → 5.へお進みください

2

4. 3で参加していると答えた方に聞きます。
活動に満足していますか？
(満足している ・ 満足していない)
→ (1)へお進みください → (2)へお進みください

(1) 満足していると答えた方に聞きます。
満足している理由をお答えください。(○はいくつでも良いです)

・活動が楽しい ・仲間とのふれあいが良い ・活動内容が充実している
・支援スタッフが良い ・スキップができる ・新しい出会いがある
・ドキドキすることが起こる ・その他 _____

(2) 満足していないと答えた方に聞きます。
満足していない理由をお答えください。(○はいくつでも良いです)

・回数が少ない ・参加者が多すぎる。または少なすぎる ・内容がつまらない
・人手が足りていない ・他の参加者と上手いかわない ・愛が足りない
・出会いが広がらない ・その他 _____

3

5. 3で参加していないと答えた方に聞きます。
参加していない理由をお答えください。(○はいくつでも良いです)

・自分の希望する活動がない ・活動場所が遠い ・送迎など移動手段がない
・時間やタイミングが合わない ・お試ができない ・異性がない
・活動がイメージできない ・一般の活動に参加したいが行きづらい
・その他 _____

6. あなたがやりたいと思っていることは、どんなことですか？
思うものに○をつけて下さい。(○はいくつでも良いです)

・より学べる学校など ・仕事の相談、再就職の相談 ・飲み会や食事会
・異性と出会う会 ・買い物 ・趣味(好きなこと)の会 ・映画鑑賞会
・コンサートやイベント ・人生相談 ・会話する力をつける会 ・公民館活動
・調理実習、洗濯実習 ・お金の使い方を学ぶ会 ・お祭りなど(地域活動)
・マンガ、アニメ、読書の会 ・携帯電話、電子マネー、ネット通販を学ぶ会
・その他 _____

質問は終わります。ご協力ありがとうございました。

4

3、アンケート調査・結果

1 2月中旬に配布し、2週間の期間で回収を行った。

・回収率

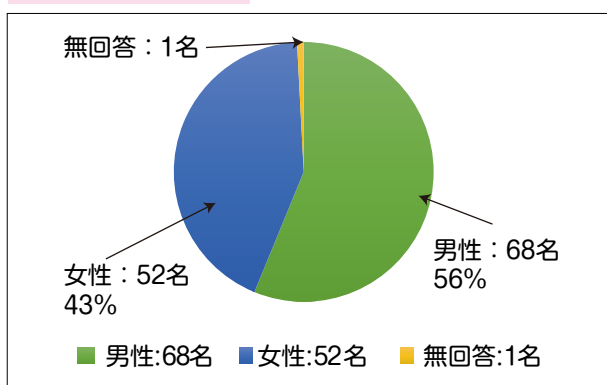
当 事 者 : 42% (配布数 286 枚、回答数 121 枚)

保 護 者 : 45% (配布数 287 枚、回答数 129 枚)

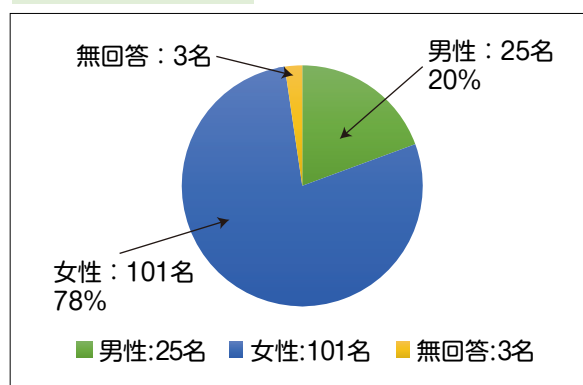
支援者・教育関係者 : 42% (配布数 273 枚、回答数 114 枚)

・性別

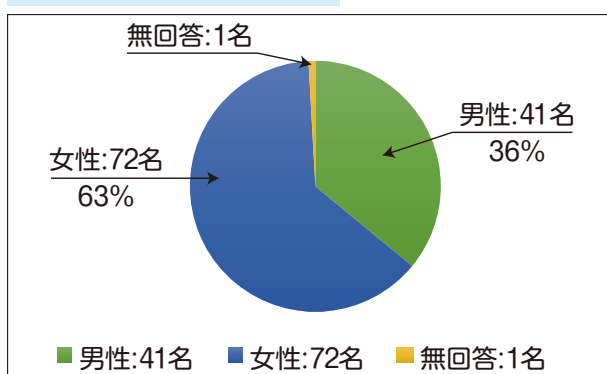
当事者



保護者

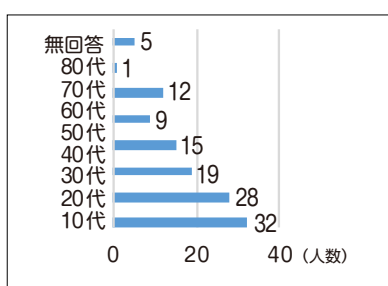


支援者・教育関係者

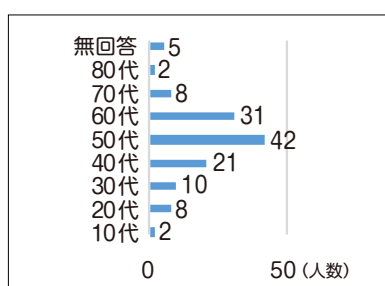


・年齢

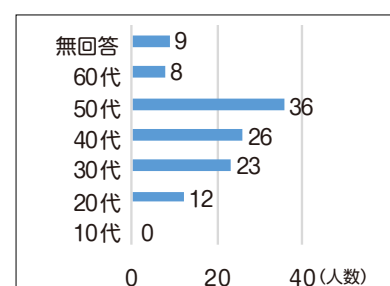
当事者



保護者

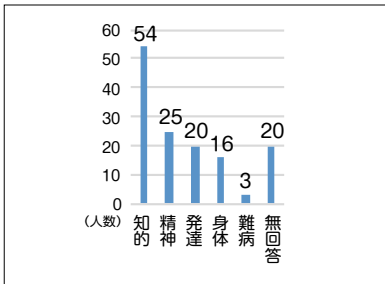


支援者・教育関係者

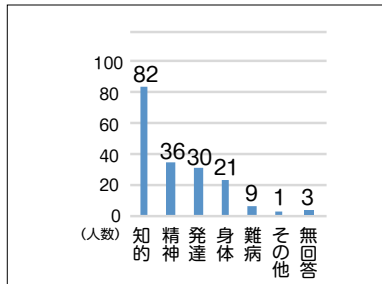


・障害別

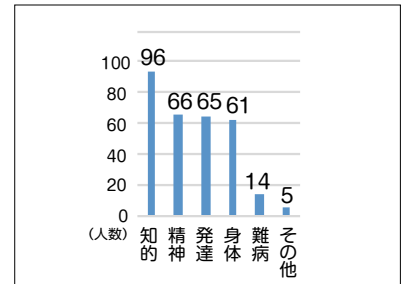
当事者



保護者

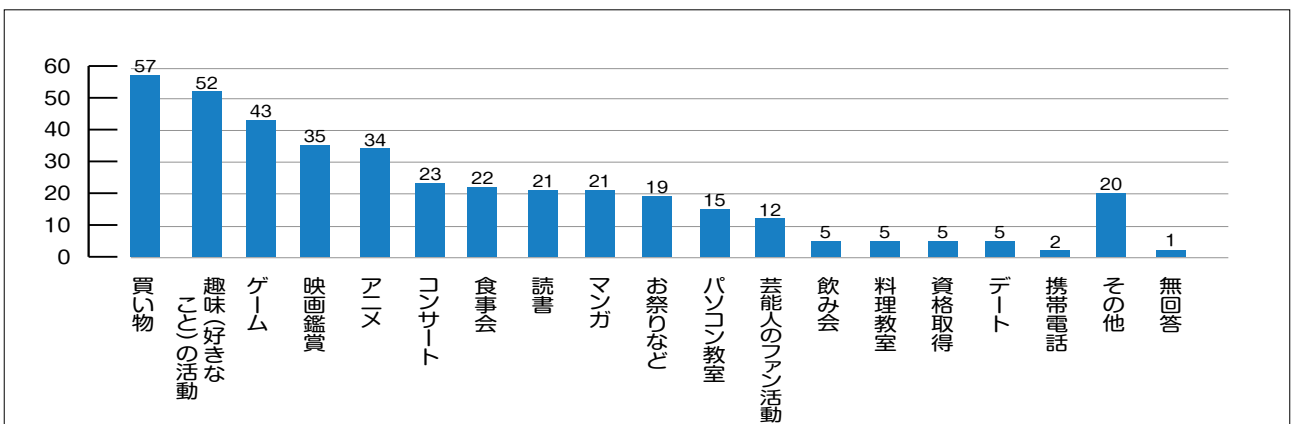


支援者・教育関係者

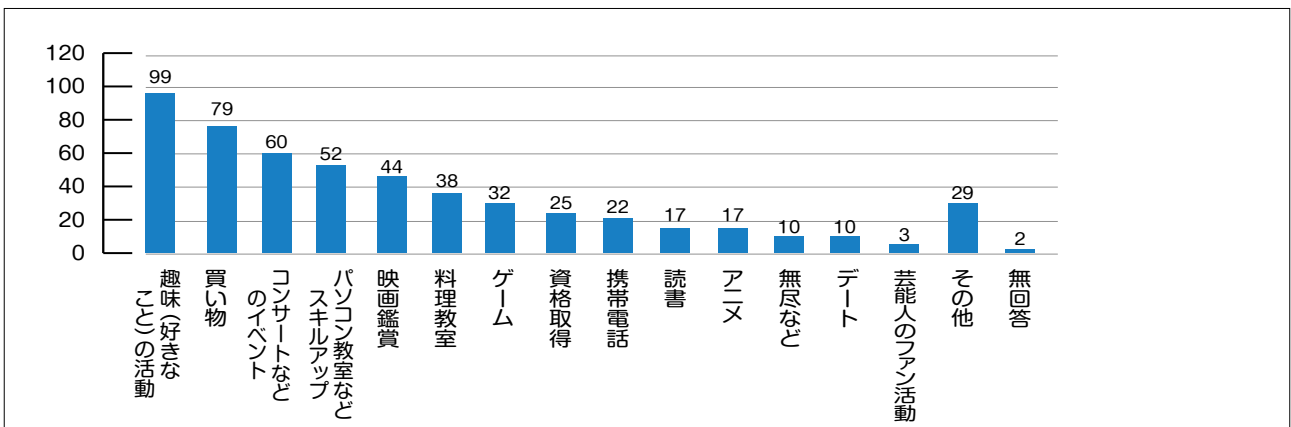


・楽しくやっていること・学んでいること

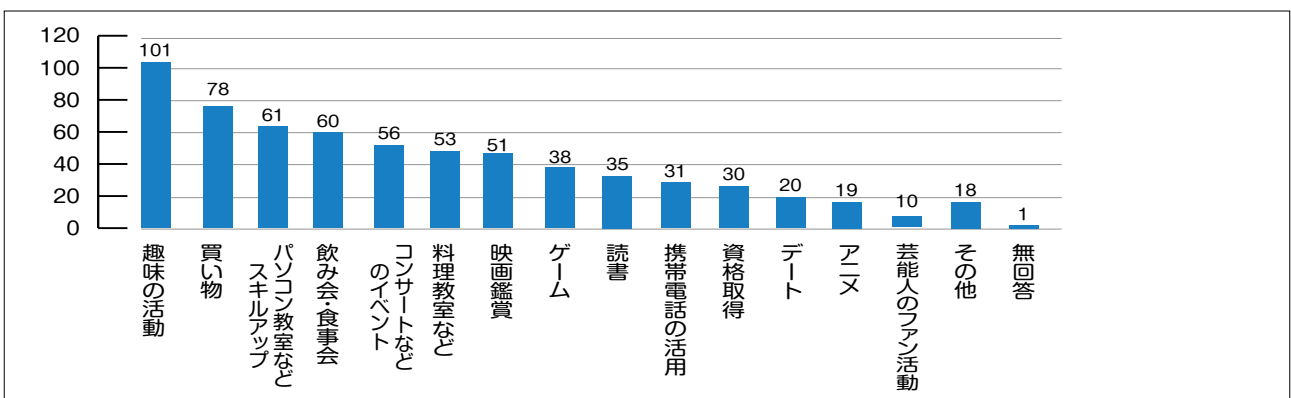
当事者



保護者

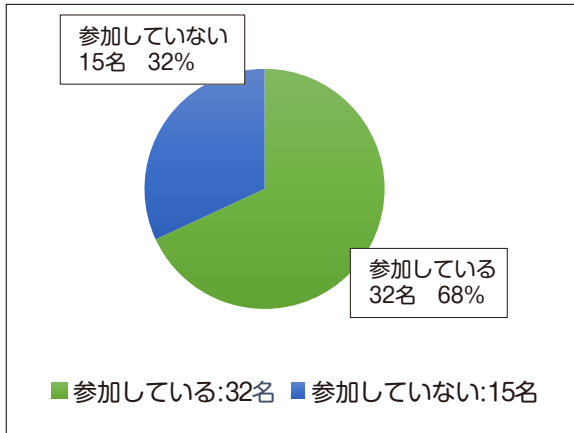


支援者・教育関係者

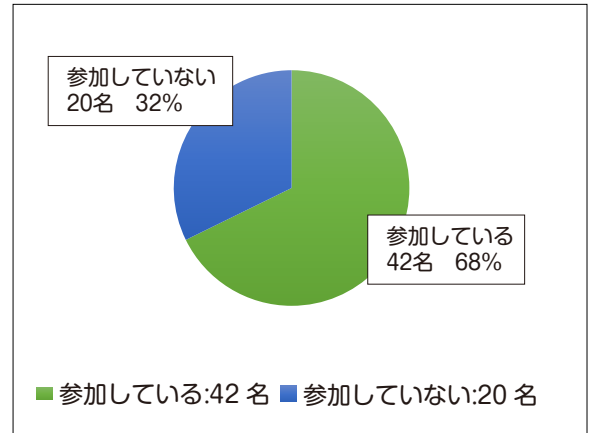


・『生活が楽しく、豊かになる活動や学び』の場に参加しているか

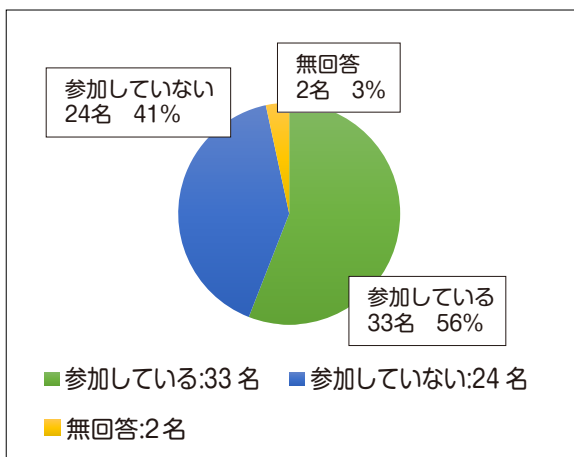
当事者



保護者

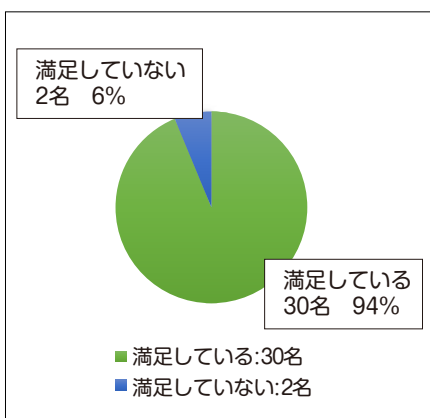


支援者・教育関係者

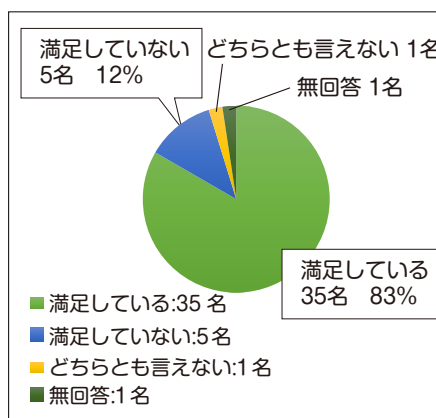


・活動に満足しているか

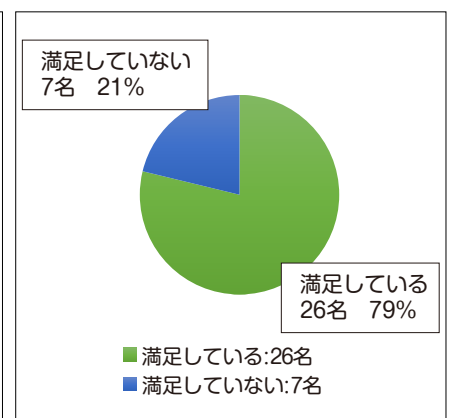
当事者



保護者

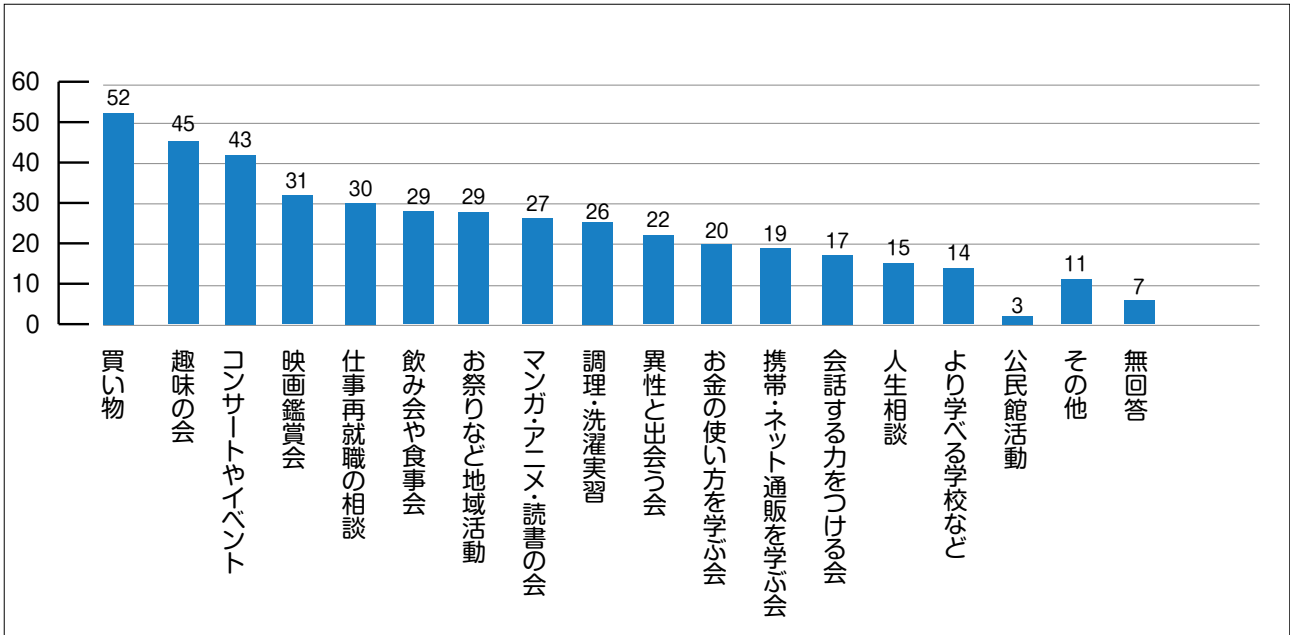


支援者・教育関係者



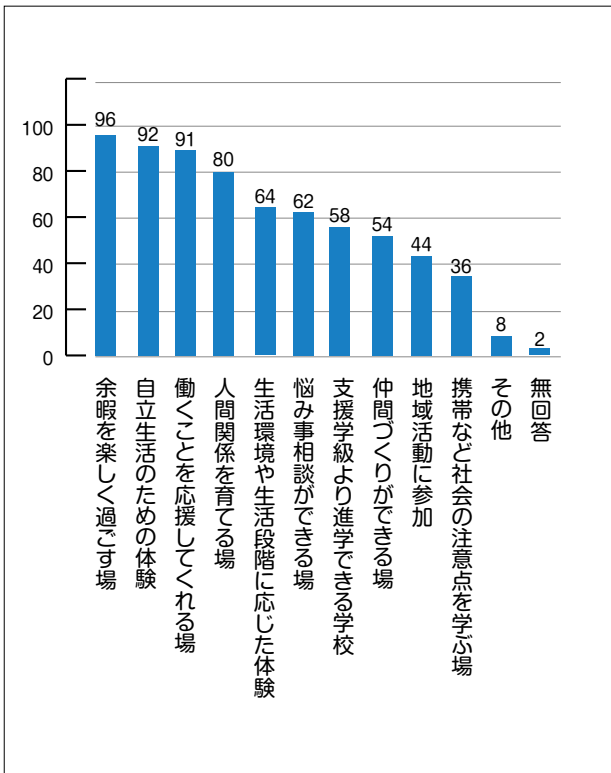
・あなたがやりたいと思っている学びや社会体験はどんなことか

当事者

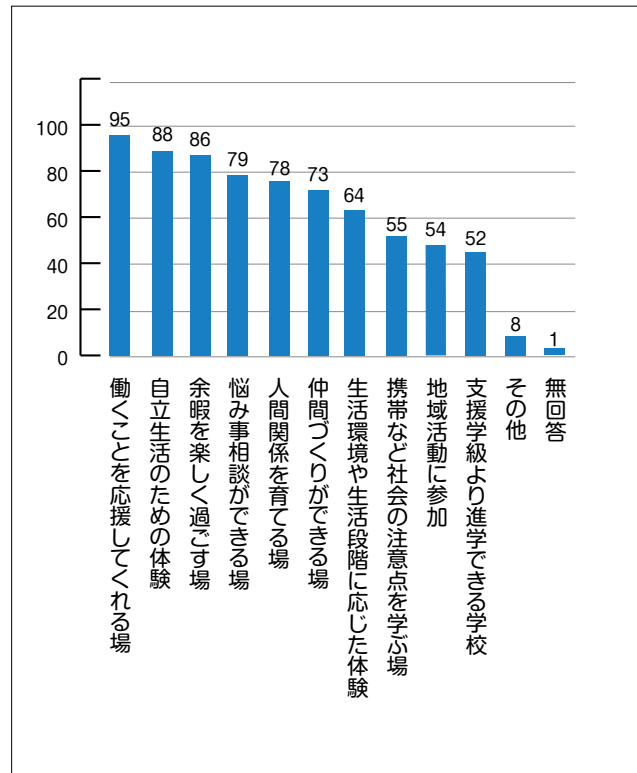


・障がいのある方に学校卒業後どんな学びや社会体験が必要か

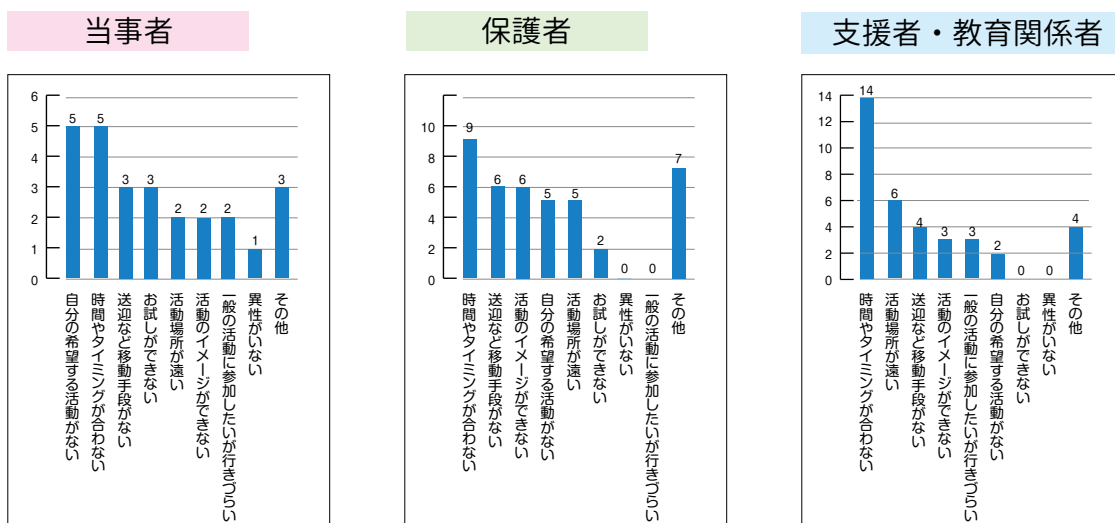
保護者



支援者・教育関係者



・参加していない理由



検証

- ・当事者の性別はほぼ半数で聞くことができた。
- ・保護者の性別は母親の回答が多く、子育ても含め、母親の担う部分が多いことが読み取れる。支援者・教育関係者も女性が多い。
- ・当事者と保護者では親子関係を感じさせる年齢層での回答者比率となった。
- ・当事者の方は障害別で知的の方が約半数となった
- ・当事者の10代、20代の回答が多い。彼らの「やりたいと思っていること」の回答から、知的の方が学校でしっかりと学んできていると感じた。彼らが普通の若者と同じことを楽しんでいることがわかり、またもっと社会に出たいと思っていることに喜びを感じる。
- ・「楽しくやっていること・学んでいること」では3者の回答に差はないと感じたが、「やりたいと思っていること」「必要と思う社会体験や学び」では当事者は楽しい活動が上位に来たのに対し、支援者・教育関係者では働くことが最多となり、保護者では僅差で余暇と仕事に並ぶ結果となった。この結果から、当事者の思いと、保護者、支援者・教育関係者の思いに隔たりがあることが考えられる。
- ・活動に参加しない理由については、当事者は「やりたいことが無い」と目的を挙げているのに対し、保護者、支援者・教育関係者は「タイミングが合わない」「送迎が難しい」など、方法になっているところが興味深い。
- ・ブリッジスクールの全受講生にはアンケートを実施していない。なぜならば受講生の全員が障害のカテゴリーに属するのではないというところにある。ブリッジスクールに参加はされているが、障害については否定される方も多い（精神科などには受診されているが）。このようなグレーゾーンの方々に対して、現在の社会は方策がない状態である。これからの社会は、かれらに対しても生涯学習に参加できる環境を整える必要があり、何らかのアプローチをして行かなければならないと強く感じた。

連携協議会

・連携協議会では、事業の進捗状況の報告と共に、県市教育委員会、市障害福祉課に集まった相談等のニーズについての意見交換を行い、ケースを共有すると共に今後の支援の在り方を検討できました。

・支援学校等とは、卒業後の社会参加についての意見をいただきながら、アンケート調査にご協力いただき、より良い拠点のあり方について信頼性を高めていくようにしました。また、支援学校の先生方からご意見をいただくことで、学び直し場としてどのようなニーズがあるのかを検討することができました。

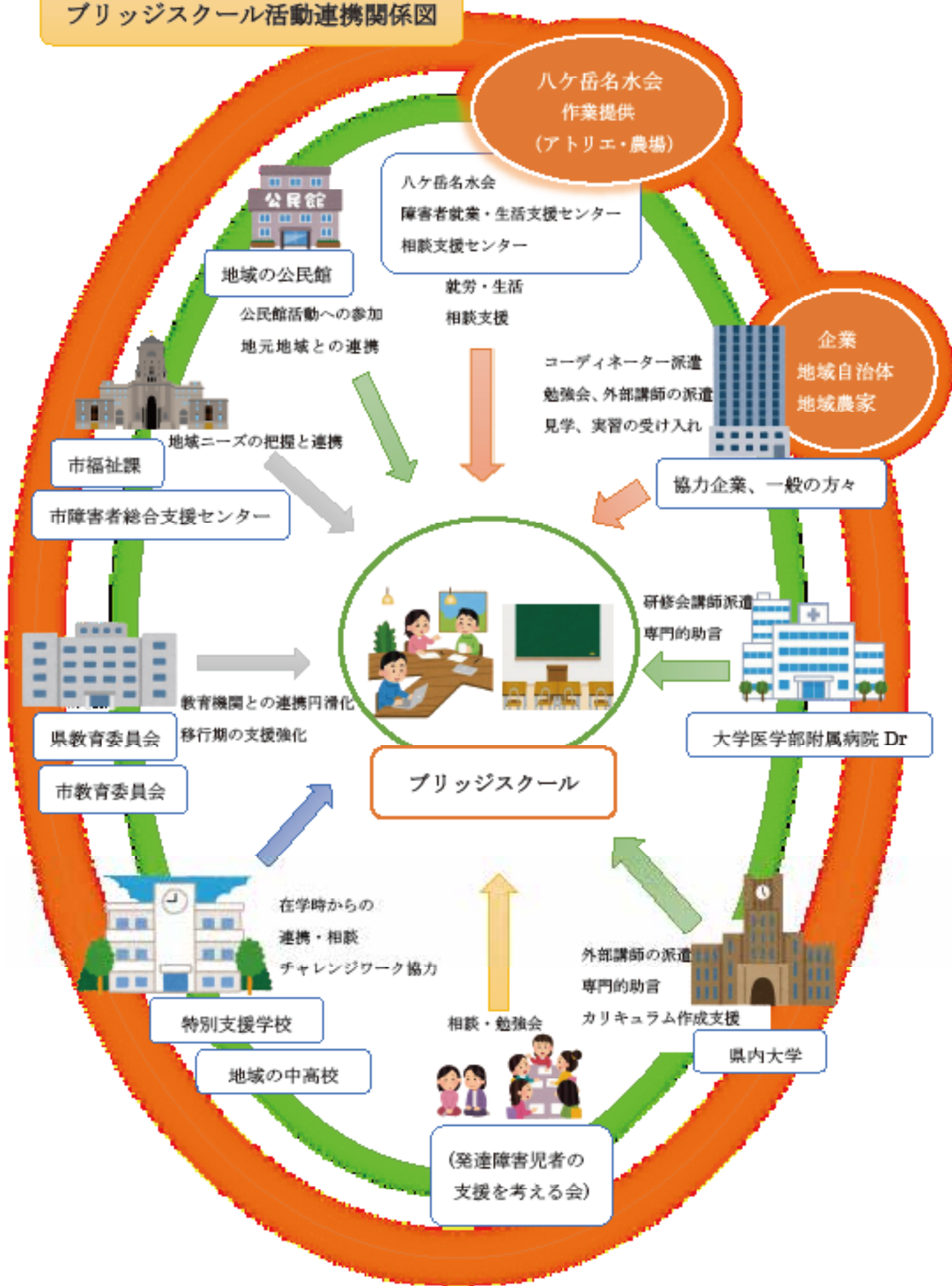
・保護者会は、ブリッジスクールへの参加の窓口として大きな役割を果たしています。今後も当事者ニーズの調査と検討を行い、どのような取り組みが社会生活を豊かにしていくかを共有していきます。

・専門機関である医療、相談支援事業との連携、企業と就業・生活支援センターとの連携もおこないました。また、社会参加のために公民館活動や地域イベントも重要なポイントとなりました。それぞれの事例に関して、どのような機関と関わり、どのような変化があったかを共有していきます。連携協議会では、これまで一緒に議論することの少なかった多職種が集まり、より豊かな生活に繋がるより良い連携と支援の在り方を議論できました。それらをストレングスにし、ツールの共有・確認をし、地域で活用できるようにしていきたいと思っています。加えて、連携協議会に参加してくださる団体と協力していくことで、学習や障害についての理解をさらに深めながら実態とニーズの把握に努めていきます。

本年度の連携協議会の方々

連携協議委員	連携協議委員
県教育庁 高校改革・特別支援教育課 課長	大学 初等教育課特任教授
県教育庁 高校改革・特別支援教育課 特別支援教育担当 主幹・指導主事	県立特別支援学校 校長
市 教育課 学校教育担当 指導主事	LD, 発達障害児者の支援を考える会 会長
市 教育委員会 教育部教育総務課 指導監	地区公民館 主事
市 福祉課 障がい福祉担当 精神保健福祉士	障がい者就業・生活支援センター センター長
市 福祉課 障害福祉課 課長	協力企業 有識者会議委員
大学医学部附属病院 精神科医師	協力企業 社会福祉士、キャリアコンサルタント

ブリッジスクール活動連携関係図



コーディネーター

目的

本年度、コーディネーターの役割は非常に大きいものでした。

コーディネーターは講座の組み立てから、ブリッジスクール全体の動き、各受講生の個別面談、電話相談、アンケート調査の準備、分析、連携協議会での役割りなど、多岐に渡り大きく貢献していただきました。しかし、その反面、業務の線引きが難しく、プライベートの時間まで受講生からの連絡が入るなどの問題が起きています。

特にカウンセラーを専業とされている方なので、精神面で不安になった時の寄り添いは他者に代えがたく、受講生からの信頼の厚さは言葉では言い表せないものです。

それだけに、働きと対価について考えざるを得ない状況です。今後もコーディネーターの配置は不可欠であり、信頼のおける方の継続と業務の範囲の取り決めなど、細かい役割分担が重要になります。



トライコースでの受講風景 マナー講座



○×クイズ



研修会でのラボの発表コーディネート



研修会 トークセッションのコーディネート



石垣 悦子氏

ブリッジスクール事業に携わり4年がたちます。この間、「みんなが先生」および「自己発信」を軸に受講生とともに毎年オリジナルのプログラムを組み立ててきました。

私たちスタッフが年度はじめに骨子のある程度策定し、受講生とともに対話を重ねながら適宜プログラムを変更していくのは、できる限り彼らの中にあるニーズに添いたいと考えているからです。何より、困りごとを言語化し、皆で対策を話し合うサイクルは今後、社会の中で暮らしていくのに必要なスキルとも考えるからです。4年というまだまだ短い期間ではありますが、興味深いことに結果的には毎年、同じようなニーズが出てきます。今年度もそうでした。

ブリッジスクールに入校する方々は年齢や社会経験など立ち位置は違っても、社会や就労に一步踏み出したいと願う方々の集まりです。月に2回集うこの小さな社会は、これまでの体験を共有し、仲間から言語・非言語を通しフィードバックをもらうことで、自己理解が促され、力を少しずつ蓄えていくことのできる場となっています。

おかげさまで、歩みの早さは違っても、ブリッジスクールに滞留することなく、地域の中で暮らすことができている実績が毎年報告されています。

人は生まれながらに素晴らしい能力や個性、感性を持ち合わせています。それが社会や環境によって本人主体や人権が脅かされ続けることで、いつしかその力が発揮できなくなる人も少なくありません。課題を抱えている人も場や機会、出会いや他者とのかかわり等からその力の回復は期待できるという考えのもと、ブリッジスクールは、文字通りの“場”だけではなく、人とつながり、時を共有する“場”のご提供として地域に存在してきました。

学びは人、暮らしを豊かにする大切なツールです。誰かから教示を受けるのも教育の一つではありますが、学びをアウトプットする、それに対し他者の考えに耳を傾け、自分と社会を知るといった繰り返しがあって学びはより深化していくのだと思います。

今年一月はブリッジスクールの紹介と受講生自らの声を発信する啓発研修会を実施しました。出席された多くの方は福祉関係者でしたが「生の声を聞いた」とアンケートでお答えいただいております。この結果から、私たちはまだまだ彼らの声を丁寧に拾っていく段階にあるのだと思います。

コーディネーター職を仰せつかり、その役割についても考える1年でした。今年度は受講生にとってのサポーターであり、運営を担うマネージャーであり、地域や人をつなげる実践家としての1年でした。コーディネーターは、今後も障害者の生涯学習の促進によって、彼らとともに共生社会を目指し、社会を変革していく大きな任務があるのだと思います。



戸田 達昭氏

多様化する社会を生き抜くため、あるいは個の夢の実現のためには学びが必要であり、これは障害の有無は関係ありません。ただ、日々のルーティンワークに追われていたり、あるいはそもそも社会との接点が少ない方々にとっては、その学びの目的を、特に学校卒業後に見出すことは難しい現状にあり、この傾向は障害を持った方には色濃い傾向があると考えられます。

ブリッジスクールの特徴は、なぜ学ぶのかという意識付けを行うこと。まさに社会との懸け橋（ブリッジ）となり、学ぶ場であるスクール（イバシヨ）と社会との行き来が可能なこと。多様な価値観を持った仲間たちがいること。生徒が地域で活躍（デバン）できるように、社会福祉法人が核となり、多様な専門家や担い手たちとコンソーシアム（協働体制）を構築して取り組んでいること。などが挙げられ、学びの目的作りから、インプット・アウトプット・アウトカムが設計された取り組みであると言えます。

地方創生の流れの中、価値の交換は他の地域や都市との交流によって行われていく中で、軸足となる地域の確立のため、地域の課題は地域で解決する、といった取り組みが重要になってきます。

それを担う地域の多様な方々が学びあい・活かしあうシステムの構築が重要となります。その中には障害を持った方も含まれるため、ブリッジスクールの仕組みや取り組みの意味と意義は大きいと考えられます。

今後、事業の持続可能性を高めるために、地域のそれぞれの担い手が、出来ること（制度やリソース、財源等）を出し合って、自立した学びのシステムの構築が求められる中、ブリッジスクールの取り組みは他地域（特に地方）でのモデルとなると確信しています。

新聞記事紹介

※山梨日日新聞社の許諾を得て掲載しています。

ひきこもり当事者の「一步」後押し 就労支援講座 企業に説明



スーパーの元店長から仕事の心構えなどを学ぶ受講生
—北杜市長坂町長坂下条 (昨年9月8日)

北杜「スクール」16日に研修会

北杜市の社会福祉法人ハゲ岳名水会(坂本ちづ子理事長)が運営する、ひきこもりの当事者や生きづらさを感じる人たちの就職などを支援する「プリジスクール」が今年目を迎える。講座参加のほか、毎年多くの相談が寄せられていて、受け入れる企業側の理解が進むことで、就労への道が開ける人はいない(担当)という。同法人は16日、企業に協力を呼びかける研修会を開く。

プリジスクールは昨年9月8日、5年に開講した。家庭から歩み出すことを目的に、スポーツやカラオケなどを交えて交流を図る「つどいコース」、11カ月間で自身の理解などを、不得意なことを整理するなど、不得意なことを整理するなど、不得意なことを整理するなどの個別に向けて具体的に学ぶ「トライコース」を実施。トライコースは昨年までに10~40代の25人が修了し、本年度も約40代の8人が受講している。

同法人によると、ひきこもりの当事者や集団生活に苦手意識を感じる人、離職期間が長期化して就労のハードルが高まっている人たちは増えてきているという。受講者は毎年7

8人ずつで推移しているが、昨後は毎生での出席率も上がっているという。研修会は16日午後1時から1時半、同法人の研修センター(二宮)で開く。同法人担当者が講師を務める。スクールの小園コースについて説明するほか、トライコース受講者が現在の職場環境や、就労しづらかったなどなどを話す。研修会は、主に受け入れ側(企業)に、研修会を通じて事前予約が必要、問い合わせは同法人(電話0551-322-0051)メールbridge@meisan.or.jp

掲載日:2019年01月09日 / 地域: 岐阜県018
紙面:記事・写真・イラスト等の無断複製・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社

ひきこもり当事者らの進路支援 「就労」「つどい」2講座で

北杜市長坂町長坂下条の社会福祉法人「ハゲ岳名水会」は20日、同所の日野春学舎で、ひきこもりの当事者や就職、就学に悩まされた人に向けて就労支援などをを行うプリジスクールを開講する。就労を目指す「トライコース」と、つながりを広げ、居場所を築きたい人向けの「つどいコース」を開講。担当者は「ともに学び合いながら、自分の納得できるカタチで生きていく方法を講座で一緒に見つけていきたい」と話している。

プリジスクールは2015年にスタート。これまでに10~40代の25人が修了し、就職、開業などの進路を選択している。

トライコースは今年10月20日から来年3月までの11カ月間、月2日ほどのペースで開催される。企業経営者やキャリアコンサルタントなどと連携し、社会に出る上で必要

加者の希望に応じて決める。昨年は料理やカーデゲームなどを通して交流を深め、今年度は希望者は地域の公民館活動に参加する機会も設けられる。小園理事長は「これまで障害などを理由に社会と距離を置いてきた人の支援は福祉が担ってきたが、地域との距離を縮めることが必要になっている。生きづらさを抱えながら、支援を受けられないでいる人はたくさんいる。自分らしく生きる方法を見つけるきっかけにしてほしい」と話している。

受講には、申込書と所定のエントリーシートの提出が必要。講座の見学も随時受け付けている。問い合わせは、同法人の事務局(電話0551-322-0051)メールbridge@meisan.or.jp

掲載日:2018年05月09日 / 地域: 岐阜県011
紙面:記事・写真・イラスト等の無断複製・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社

ひきこもり支援 関係者らに説明

北杜市の社会福祉法人ハゲ岳名水会(坂本ちづ子理事長)はこのほど、岐阜市民交流センター(二宮)で、ひきこもりの当事者や生きづらさを感じている人を支援する「プリジスクール」に関する研修会を開いた。

障害者教育や医療関係者のほか、障害者雇用を検討して



いる事業所担当者45人が参加。プリジスクールとして同法人が開講しているコースしかつたこと、などについて話した。

現役の受講生は、どんな部分に生きづらさを感じているか発表。専門家によるパネルディスカッションもあった。

45人が参加した研修会
—岐阜市民交流センター(二宮)

掲載日:2019年02月01日 / 地域: 岐阜県019
紙面:記事・写真・イラスト等の無断複製・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社

平成 30 年度文部科学省委託事業

『障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究』

ブリッジスクールによる障害者の生涯学習と社会参加の実現」事業報告書

発行日 平成 31 年 3 月 1 日

企画・編集・発行

社会福祉法人八ヶ岳名水会 企画事業部

〒 408-0025 山梨県北杜市長坂町長坂下条 1237-3

TEL 0551-32-0035 FAX 0551-32-6351

発行責任者

坂本 ちづ子（社会福祉法人八ヶ岳名水会 理事長）

小泉 晃彦（社会福祉法人八ヶ岳名水会 常務理事 ブリッジスクール校長）

編集

窪川 敦之 相吉 謙輔 植松 玉美 横内 心平

印刷・デザイン

株式会社ピー・エス・ワイ

表紙デザイン

依田 正樹